

# カバラの基本概念

ラビ Rav Michael Laitman 博士

次のことを心に銘記しなさい。

エマナティオ【訳注：万物の始まりであるとされる「流出」】が始まり創造物が創造される前は、

上方からの純粋な光が存在するもののすべてを満たし、

真空やくぼみ、穴などといった空虚なものはなく、

すべてが純粋で無限な光で満たされていました。

頭や尻尾のような部分は存在せず、

万物が平等、均等に釣り合った純粋で滑らかな光でした。

それは無限の光と呼ばれます。

神はその純粋な意志に基づいて、その偉業の完成と御名と称号を輝かせるために世界を創造しエマナティオを発することを願われました。

世界を創造する理由はここにありました。

しかし、そのとき神は中心【訳注：エマナティオの中心、すなわち創造の原点】でご自分を抑制され、

ちょうど中心で

光を抑制されたのです。

光はそうした中心から引き離されてそれを取り囲むへりに引き寄せられました

そして、その中心の周りには

空虚な空間と真空が残されたのです。

抑制は空虚な中心を均一に取り囲んだので、

宇宙は均一な円形に形作られたのです。

そして、抑制によって無限の光のちょうど中心に真空と空間が作られた後、  
流出物と創造物が存在し得る場所が作られたのです。

そして、無限の光から、1本の線が垂れ下がり、  
その空間の中に降りて行きました。

神はその線を通して、

4つの世界のすべてを生み出し、創造し、形作り、築かれました。

これら4つの世界が存在する前は、

唯一の造物主と1つの御名が、驚くべき、しかし目には見えない統一性をもって  
存在していました。

神に最も近い天使の中でさえ、

無限な光【訳注：神】の中に存在する力や達成は存在しません。

同様に、神を認識することのできる精神も存在しません。

なぜなら、神が存在する場所、神と神以外のものを区別する境界、神を識別する  
名前が存在しないからです。

ARI (16世紀の偉大なカバリスト) 著、『生命の木』

## 著者注釈

本書は、ごく基礎的なものと思われるかもしれませんが、カバラの基礎知識を伝えるためのものではありません。本書はむしろ、読者がカバラの概念である形而上【訳注：形がなく、感覚では捉えることのできない】の物と、形而上の言葉へのアプローチを深めることを援助するための書物です。

本書に記されていることを何度も読むことによって、読む前には心の中に存在しなかった内面的な見解、感覚、およびアプローチが生まれます。新たに獲得されるこうした感覚は、通常感覚では見ることのできない我々の周囲の空間を「感じ取る」センサーに喩えることができます。

したがって、本書は、形而上の言葉についての考察を促すことを目的としています。我々がこうした言葉と合体する範囲の中で、我々を取り巻く精神構造が、我々の内面にある考え方によって、あたかも霧が晴れていくかのように明らかにされていくのが見え始めます。

再度申し上げますが、本書は事実の研究を目的とするものではありません。そうではなく、本書は、自己が持ち得る最も深くかつ最も捉え難い感覚を目覚めさせたいと望む初学者を対象とするものです。

Michael Laitman

はじめに.....	4
第1章 カバラにおける認知の方法.....	8
第2章 カバラの目的.....	12
第3章 カバラが与えるもの.....	14
第4章 完成と世界.....	17
第5章 意思の自由.....	20
第6章 カバラの本質と目的.....	25
第7章 『ゾハールの書』の後書きより.....	28
第8章 カバラの言葉.....	33
第9章 『ゾハールの書』の前書きより.....	36
第10章 『ゾハールの書』の序章より.....	42
第11章 『10個のセフィロートの研究の手引き』より.....	60
第12章 カバラの知識の秘密を公開するための条件.....	64
第13章 基本概念.....	66
第14章 FAQ（よく尋ねられる質問）.....	72

## はじめに

心を少しだけ開いてごらんください。そうすれば、世界が見えるようになります。

—— ズハールの書

- 自分は誰だろう。
- なぜ自分が存在するのだろうか。
- 我々の過去はどこにあるのだろうか。我々の将来はどこにあるのだろうか。また、この世における我々の目的は何なのだろうか。
- 我々は、かつてこの世に存在したことがあるのだろうか。
- この世にはなぜ苦しみが存在するのだろうか。また、我々はそれを避けることができるのだろうか。
- どのようなすれば、我々は平和や充足や幸福を実現することができるのだろうか。

何世代にもわたり、人々はこれらのうんざりするほど執拗な質問に対する答えを見出そうと試みてきました。こうした試みは何世代にもわたって続いているという事実から、我々が未だそれらに対する満足な答えを得ていないことが分かります。

自然と宇宙を研究するうちに、我々を取り巻くすべてのものが精密で目的のある法則に従って存在し機能するという事実が見出されます。しかし、我々が森羅万象の頂点である我々自身について内省してみると、合理的な法則で成り立っているこうしたシステムの外部に人類が存在するように見えることが分かります。

例えば、我々の体が自然によっていかに賢明に創造されたか、また、我々の身体のあらゆる細胞がいかに精密かつ意図的に機能しているかに我々が気付いたとき、「生命体全体がなぜ存在するのか」という問題に答えることができなくなります。

我々を取り巻くすべてのものに因果関係が成り立っています。目的なく創造されるものはありません。形而下の世界は運動、変化、および循環の精密な法則によって支配されています。しかし、「形而下の世界全体（我々だけでなく宇宙全体）がなぜ存在するのか」という根本的な問題に対する答えは、見出されないままです。この問題に一度でも心を動かされた経験のある人はこの世に存在するのでしょうか。

こうした根本的な問題は、人類の起源が進化の過程で生まれた原始の種であるか、地球外生物の訪れや定住の過程で生まれた原始の種であるかにかかわらず不変です。すべての人の人生には、誕生の日と死の日という 2 つの大切な日があります。それらの日の間に起こる事象は、人によってそれぞれ異なるので、極めて価値のあるものなのです。そうした事象は、また、人生の終わりに暗闇や亀裂があれば無意味なものにもなり得るのです。

我々の知性、博識性、目的がなければ何もしないという首尾一貫性はどこに存在するのでしょうか。すべての原子、人体のすべての細胞に原因と結果が存在します。しかし、生命体全体の目的は何なのでしょう。おそらく、何らかの法則と目的が存在するのですが、我々はまだそれらを見出すことができません。

我々は、進化のレベルが我々よりも低いものについて研究することができます。我々は、無生物、植物、および動物の存在の意味を認識し理解することができますが、人類の存在の意味を理解することはできません。明らかに、これを理解できるようにするには、より高い存在レベルからのアプローチが必要なのです。

世界についての我々の研究は結局、我々が世界に与える影響に世界がどのように反応するのかについての研究ということになります。我々は、我々自身のレベルで研究できるにすぎず、それを超えるレベルでは研究できません。我々が我々自身のレベルで世界について研究する場合でも、世界に何らかの影響を与え、その影響に対する反応を測るという手段に頼っています。我々は、五感、すなわち視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚で、我々が世界に与える影響を認識します。あるいは、我々の限られた感覚の感度範囲を広げる手段を利用することもあります。

残念ながら、我々は、我々の感覚で認識し研究できるもの以外のものを全く認識することができません。存在すると思われるいかなるものも、我々が感じるものの中にのみ存在し、我々と異なる感覚を備えた生き物は、全く異なる感じ方で同じことを経験すると考えられます。

同時に、我々は、手に 6 本目の指がないというような感覚器官の不足を感じません。生まれつき目が見えない人に視覚の意味を説明することが不可能であるのと同様に、自然の隠れた形態は、我々が現在用いている研究方法では見出すことはできないでしょう。

カバラによれば、我々の感覚器官では認識できない形而上の世界が存在するとされています。その中心に 1 つの小さな部分、すなわち宇宙とその中心にある地球が存在するのです。このような情報、思想、および感情から成り立つ領域は、実体性を持つ法則とそこでの出来事を通して、我々に影響を与えます。また、こうした領域においては、我々は、我々が行動する際に従わなければならない特定の条件に支配されます。

我々は、自分の誕生の場所や時、また、自分と一緒に生まれる人や自分が持って生まれる特徴や性癖を選択することはできません。我々は、自分の人生で出会う人や、自分が育つ環境を選択することはできません。これらのことは、我々の行動や反応のすべてを左右するにとどまらず、そうした行動や反応の結果のすべてをも左右します。それ故に、我々の意思の自由はどこに存在するのかを理解することができないのです。

カバラによれば、獲得すべき 4 種類の必須の知識があります。

**天地創造**：天地創造および世界の進化についての研究。すなわち、

- 創造主が世界を創造し、創造物を一貫した制約の中でそこに住まわ

せた方法についての研究。

- 形而上の世界と実体的な世界間に存在する相互作用の法則とその結果についての研究。
- 人類の創造の目的、すなわち、肉体と精神を結合させ、かつ、それぞれ明の効力と暗の効力を持つ 2 つの互いにバランスの取れたシステムを助けとして、自然および目に明らかな運命の因子を媒介としてそれらを統御することについての研究。

**機能：**人類の本質、すなわち形而上の世界との相互のつながりおよび相互作用についての研究。機能は、こうした形而上の世界への到達、およびそこから離脱と関係します。この研究には、人類の行動によって引き起こされる、上層世界の我々の世界に対する反応と他の人類に対する反応も含まれます。この研究では、すべての人がたどる、世界の創造から究極目標の達成までの個々の道りについての研究も行なわれます。

**魂の化身：**あらゆる魂の本質とその化身、および現世の人生における我々の行動と来世の人生にもたらされるそうした行動の結果についての研究。化身についての研究では、魂がどのように、なぜ肉体に降臨するのか、また、ある魂がある肉体の中に受け入れられるかどうかを決定するものは何であるのかについて考察します。

魂の化身は運命の神秘性とも関係し、それについての研究では、人類の歴史を運命の特定の秩序と周期の結果として研究します。この研究ではさらに、6,000 年にわたるこうした道りをたどり、魂と世界のシステムの普遍的な支配との関係や、生と死という魂の周期について研究します。この研究はまた、現世における我々の道りが何によって決定されるのかについても言及します。

**支配：**我々の世界についての研究。具体的には、無生物レベル、植物レベル、および動物レベルの自然についての研究、それらの本質と役割についての研究、ならびに形而上の世界がそれらをどのように支配するのかについての研究。この研究では、上層の支配、および自然、時間、空間に対する我々の認識についての研究が行われます。この研究ではまた、物体を動かす上層の力についての研究や、人の内面に存在する力が、万物を生物であるか無生物であるかにかかわらず、予め定められた目標に向かってどのように突き進ませるのかについての研究も行なわれます。

人類の起源についての問題に触れずにこうした根本的な人生の謎を解くことはできないでしょう。万人がこうした問題に直面しています。存在の目的や意義に対する追求が、重要な問題として人類の精神的な生活を取り巻いています。このような状況にあるが故に、20 世紀の後半を迎えるにあたり、人類の精神的向上心の復活が見えつつあります。

多様な人生観をもたらした技術的進歩や地球規模の破局は、人類に精神的充足をもたらしませんでした。カバラが説くように、我々の世界は、現存するあらゆる

喜びのうちわずかな輝きを得たにすぎません。有形物の中に存在するそうした輝きが、我々のあらゆる世俗的な喜びをもたらしているのです。

言い換えれば、我々の喜びの感覚はすべて、その源が何であろうと、有形物の中に存在するこうした輝きによってのみもたらされるのです。我々は、生涯を通して、より大きな喜びを得ることを期待して、新たな喜びの目標を必然的に探し求める状況に置かれています。我々は、そうした喜びの目標がうわべだけのものであるかもしれないという疑いを持たないのです。

絶対的な充足を得るには、物質を超越した精神的向上が必要であることを認めなければなりません。我々の世界には、そうした目標に到達するための道が 2 つあります。その 1 つは精神的向上の道（カバラ）であり、もう 1 つは苦難の道です。

カバラの道は、エゴイズムが悪と認められるように上層の光が用いられたときにエゴイズムを徐々に終結させる必要性を、独自にかつ自発的に実現する道です。

時には、こうした実現に不意に到達する人もいます。俗人、有名人、平穏な人が、突然激しい不満を感じ始め、興奮、喜び、生活嗜好、満足といった輝きがすべて、その人の日常生活から失われてしまうのです。

これは、物質的豊かさが精神的なひもじさをもたらしている我々の時代に当てはまる状況です。我々は、充足の別の源を探し始め、長く険しい道を選択することもしばしばあります。意思の自由は精神的向上の道と苦難の道との狭間に存在するのかもしれませんが。人が願うことができるのは、唯一、人類が過去においてしばしば歩んだ道、すなわち苦難の道に旅立つ代わりに「人生を選択する」ことなのです。



## 第1章 カバラにおける認知の方法

カバラは、絶対的な法則に従ってこの世に存在する創造物が創造主に到達するという1つの高位の目標に一体化する精神的根源の間の因果関係について説いています。

カバラによると、全人類とすべての個人が、この究極的な到達点に達し、創造の目標と計画を十分に達成しなければならないとされています。何世代にもわたり、各個人が個別の取り組みを通して特定の精神レベルに到達してきました。「カバリスト」と呼ばれる人々は、精神的梯子の最上部まで登り詰めてきました。

最も小さなものから最も大きなものに及ぶ形而下のすべての物とそれらの行為は、我々の宇宙全体を満たす形而上の力によって動かされています。喩えれば、我々の宇宙はこうした力の網の上に載っているようなものなのです。

単に種を繁殖させ維持する役割しか持たない微生物を例に挙げます。そうした微生物中でどれほど多くの力と複雑なシステムが機能しているのか、また、そうした微生物のうちどれほど多くのものが人間の目で捉えることができないのか想像してみてください。想像した力とシステムの数に現存する生命体の数を掛けてみると、また、かつて我々の宇宙や形而上の世界に生存していた生命体の数を掛けてみると、生命体を支配する力や関係の数が途方もなく大きいことが漠然と分かります。

形而上の力とは、2つの相互に連結した同等のシステムであると表現できます。これらのシステムの間の違いは、一方は創造主から生まれ、上層からあらゆる世界を通り抜けて発達し、我々の世界になったものであり、もう一方は我々の世界で始まり、かつて第一の世界で生み出され、現在は第二の世界で機能する法則に従って上昇するものであるということです。

カバラでは、第一のシステムは「世界の創造の秩序、すなわちセフィロート」と定義され、第二のシステムは「予言と魂への到達、またはそれらのレベル」と定義されています。第二のシステムは、究極的な階級に到達したいと願う人々はカバラで研究されている第一のシステムの法則を守らなければならないことを教えています。人がこうした階級に登り詰めたとき、第二の要素がその内面に生まれます。これが精神性というものなのです。

形而下の世界には、電気や磁気のような我々が直接感じることでできない力や現象が多く存在しますが、小さな子供でもそれらの名前やそれらの作用の結果をよく知っています。例えば、我々の電気についての知識は限られたものであるのに、我々はそれを我々のために利用することを習得しており、パンや砂糖のようなものに名前をつけるのと同じくらい当然にその意味を明確にしています。

これは、我々がカバラにおけるすべての名称から形而上の物についての現実的かつ客観的な認識を得るのと似ています。考え直してみると、我々は、形而上の物について理解できず、また、創造主自体についてすら理解できないのと同じくら

い、あらゆる物について無知であり、自分の手でつかむことのできる物についてさえ無知であるのです。その理由は、我々が物自体を認識するのではなく、物が我々の感覚に与える影響に対する反応を認識することにあります。

こうした反応は、物自体の本質は我々にはまったく見えないにもかかわらず、我々に知識らしきものを与えます。我々は、また、自分自身すらまったく理解することができません。我々が自分について知っていることはすべて、自分の行動と反応に限られているのです。

世界の研究の手段として、科学が物質の特質についての研究と、物質の形態についての研究の 2 つの分野に分類されます。言い換えれば、宇宙の万物が物質と形態から成り立っているのです。例えば、テーブルは、木などの物質がテーブルの形を担う土台となっている、物質と形態の組み合わせです。あるいは、「嘘つき」という言葉について言えば、人間の身体という物質が偽りという形態の担体となっているのです。

物質を研究する科学は、科学的結論をもたらす試験／実験を土台としています。しかし、物質と無関係な形態を研究し、そうした形態を観念的に切り離す科学は、実験を土台とすることができません。これは、物質と結び付くことのなかった形態についてより当てはまります。なぜなら、我々の世界には物質を伴わない形態は存在しないからです。

形態は、我々の想像の中においてのみ、物質から切り離すことができます。したがって、そのような場合に得られる結論はすべて、理論上の仮定のみに基づくと考えられます。あらゆる哲学がこの種の科学に言及し、人類はしばしば、哲学者の実体のない結論に悩まされてきました。現代の科学者の大半は、哲学の結論がまったく信頼できないという理由で、この種の研究を拒否してきました。

我々は、形而上の世界を研究するうちに、我々の認識は、我々が自分自身を創造主の一部であるかのように感じるのではなく、それとは別に存在する実体であるかのように感じることを望む上層からの意志にすぎないことに気がきます。周囲の世界全体は、実際には、形而上の力の我々への影響の結果なのです。それ故に、周囲の世界が幻想の世界と思われるのです。

私が言いたいことを、寓話を用いて説明します。

「昔、御者がいました。御者は 2 頭の馬と 1 軒の家を持っており、また、彼には家族がいました。突然、彼は、次々と不幸に見舞われました。馬と妻と子供が亡くなり、家が壊れました。まもなく、御者は悲しみのために亡くなりました。天の法廷では、そのような悩める魂に何を与えることができるか議論されました。御者に、自分の家で家族と一緒に生きているように感じさせること、自分が良い馬を飼っていて自分の仕事と生活に満足しているように感じさせることが最終的に決定されました。

こうした感覚は、時によっては、夢が現実と思えるのと同じように認識されることがあります。実際は、我々の感覚が唯一、周囲の世界を描写します。そうであ

るなら、どのような方法で幻想と現実を区別できるのでしょうか。

あらゆる科学と同様に、カバラも、物についての研究と、形態についての研究に分類されます。そうとは言え、カバラは顕著な特徴を持ち、また他の科学よりも優位に立っています。カバラでは、物から抽出される形態を研究する部分でさえ、専ら実験に基づく支配に基礎を置いています。つまり、そうした部分でさえ、経験的な試験の対象となっているのです。

カバリストは、研究している物の形而上のレベルに上昇したとき、その物の本質を捉え、それによって最大限の洞察力を獲得します。このような人は、物のさまざまな形態を、それらが物として現れる前にも、幻想を傍らから見ているかのように、実際に操ることができます。

カバラでは、他のあらゆる教えと同様に、特定の用語と表象を使用して、物と行動を描写します。形而上の力や、世界や、セフィラは、それが支配する世俗的な物の名称と呼ばれます。

すべての形而下の物または力が、それを支配する形而上の物または力に対応するので、形而下の世界から取られた名称とその形而上の根、源との間に完全に正確な一致が生じます。

したがって、形而上の力と形而下の物との間の相関関係を明確に知るカバリストのみが、形而上の物に名前を与えることができ、ある物の形而上のレベルに到達した人のみが、我々の世界におけるその物の影響の結果を理解できるのです。

カバリストは、「枝の言葉 (language of the branches)」を使用して、書物を書き、その知識を他の人に伝えます。この言葉は、形而上の根と形而下の枝との間の関係に基づいているため、非常に正確です。物とその形而上の根との間の関係は不変であるため、これを変えることはできません。同時に、我々のこの世の言葉は、根に結び付かずに枝のみに結び付いているため、正確さを徐々に失いつつあります。

しかし、形而下の物の名前を知っているだけでは、その物の形而上の形態を理解することはできないので、言葉についての単なる名ばかりの知識は、十分なものであるとは言えません。人は、形而上の形態についての知識によってのみ、その形而下の結果、すなわち枝を理解できるのです。

したがって、人はまず形而上の根と、その本質および性質に到達すべきであると結論付けることができます。それが実現したときのみ、人はその根の名前をこの世の枝に受け継がせ、形而上の根と形而下の枝との間の相互のつながりについて研究することができるのです。また、そのときのみ、人は「枝の言葉」を理解して、形而上の情報の正確な交換を促進できるのです。

「人がまず形而上の根に到達すべきであるなら、初学者は、師の正しい知識を得ずにどのようにしてこの科学を習得することができるのか」という疑問が生じるかもしれません。初学者は、精神性に対する強い願望を持つことによって、正しい方法を見出し、上層世界の感覚を獲得するというのがその答えです。これは、

真正な根源を研究することによってのみ達成され、また、あらゆる形而下の儀式から分離することによって達成されます。

## 第2章 カバラの目的

カバリストは、天地創造の目的は楽しさと喜びを創造物にもたらしことであると主張しています。楽しむ意思（器または魂）は、その願望の強さに応じて喜びを受け取ります。

それ故に、すべての世界のすべての創造物は、変化する、喜びを受け取る願望であるにすぎないのであり、創造主はこの願望を満たすものであるのです。喜びを受け取る意思は、天地創造の形而上および形而下の実体であり、既存の実体、および将来現れるであろう実体を含みます。

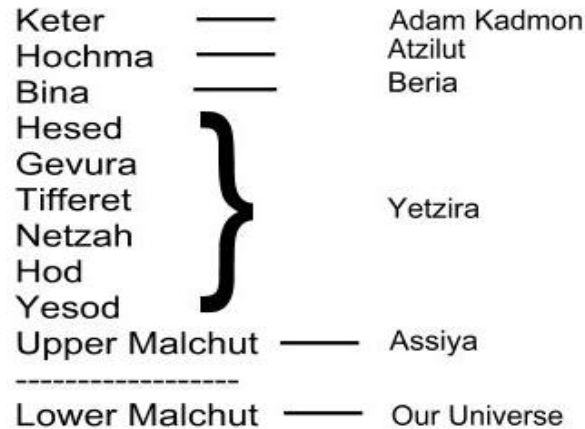
多様な形で発現する（無機物、植物、人間、色、音など）物は、異なる量の、喜びを受け取る意思にすぎません。創造主が発する光は、そのような物に生命力を与え、それらを満たします。楽しむ願望（「器」と呼ばれるもの）と喜びをもたらす願望（「光」と呼ばれるもの）は、本来、量的に互いに一致していました。つまり、器（楽しむ意志）は、最大限の喜びを受け入れていたのです。

しかし、願望が弱まるにつれて、器とそれを満たした光も次第に縮小し、創造主から遠ざかり、ついには最も低いレベルに到達し、そこで楽しむ意思が最終的に物質的な形をとるようになったのです。

上層世界と我々との間の唯一の違いは、我々の世界では器（喜びを受け取る意思）が、「物体」と呼ばれるその最低のレベルで存在することです。

器は、その最終的な物質化に至る前に、10個のセフィロート（レベル）、すなわちケテル（王冠）、コクマー（知恵）、ビナー（理解）、ケセド（慈悲）、ゲブラー（峻厳）、ティファレト（美）、ネツァク（勝利）、ホド（栄光）、イエソド（基礎）、マルクト（王国）に分けられる4つの段階を経て変化します。これらのセフィロートは、創造主が創造物に向ける光を抑制するフィルタとなります。これらのフィルタは、我々の世界に存在する創造物が知覚できる程度まで光を弱める役割を持っています。

ケテルというセフィラ（セフィロートの単数形）は「アダム・カドモンの世界」とも呼ばれ、コクマーというセフィラは「発散（atzilut）の世界」、ケセドからイエソドまでのセフィロートは「形成（yetzirah）の世界」、マルクトというセフィラは「行為（Assiya）の世界」と呼ばれます。行為の世界の最後のレベルが我々の宇宙を構成しています（図1参照）。



カバラでは、このレベルを「Olam ha Zeh（現世）」と呼びます。これは、そこに存在する人々によって認識され、器、すなわち楽しむ意思是「実体」と呼ばれます。「喜び」と呼ばれる光は、生命力として認識されます。

実体を満たす光は、カバラで説明される、創造主が与える特定の規則に従って、我々はその源を感じないように弱められます。それにもかかわらず、我々は、エゴイズムを取り除いて自分自身を浄化し、上述のすべての世界を経て上昇し、源に戻ります。

我々が到達する形而上のレベルが高くなるにつれて、我々が受け取る光の割合も増加し、ついに我々は、創造の曙から我々に向けられた全部の光（絶対的で無限の喜び）を受け取ることができるレベルに到達します。

すべての魂は、形而上の光に包まれています。カバラの初学者にとっては、真正な源にある何を研究しているのかを理解するのが困難であるかもしれません。それにもかかわらず、初学者の理解に対する強い願望が、彼らを包む上層の力を呼び起こし、この上層の力の効力が彼らを浄化し、その結果彼らは上昇するのです。これは、現在の人生において起こらなければ、将来の人生において起こると考えられ、すべての人がカバラを研究し、創造主についての知識を受け入れる必要性を感じるようになります。

光は、それが人間の魂に浸透し始める形而上のレベルに人間が到達するまで、人間の魂を外側から包みます。内面に光を受け入れるかどうかは、各人の願望と心構えと、各人の魂の純粋さによってのみ決まります。

とは言え、人は、研究の途中にセフィロート、世界、および自分の魂に関係付けられた形而上の行為の名前を言うことができます。このように、魂は外側からの光のうちの微量、すなわち、魂を徐々に浄化し、それが形而上の活力と喜びを受け入れることができるように準備させる光を受け入れているのです。

### 第3章 カバラが与えるもの

偉大な賢人であった、ラビ・アキバ (Akiva) (紀元 1 世紀) は、「「汝のごとく隣人を愛せよ」は形而上の法則のすべてを包括する原則である」と述べています。

周知のとおり、「包括的」という語は、その構成要素の総体に対して用いられません。したがって、ラビ・アキバが隣人への愛 (多くの形而上の法則の 1 つ) と、社会および創造主に対する我々の義務を包括的法則であると説くならば、その他すべての法則はこの原則の単なる構成要素にすぎないということになります。

しかし、この理由を見出そうと試みると、賢人 Hillel のより非凡な所説に遭遇します。Hillel の弟子は、片足で立ったまま、カバラの全知識を教えるよう Hillel に頼みました。Hillel は、「自分が嫌うことは、他人にするな。」と答えました。

Hillel の答えは、カバラの存在の目的全体、より明確には、カバラの存在の理由は、「汝のごとく隣人を愛せよ」という 1 つの法則を明確にし、成し遂げることでありと我々に教えています。とは言え、どのようにしたら自分のごとく他人を愛することができるのでしょうか。自分のごとく他人を愛することは、自分が自分自身の願望を満たすことができないときに、すべての他人のすべての願望を絶えず満たすことを意味すると考えられます。この賢人はさらに、自分自身の願望よりも先に他人の願望を満たさなければならないと説いています。

例えば、次のようなことが記されています (『トサフォット (Tosfot)』、『Masechet Kidushin』)。枕が 1 つしかなければ、それを友人に与えなければなりません。椅子が 1 脚しかなければ、そこに他人を座らせ、あなたは立っているか地面に座らなければなりません。そうしなければ、隣人を愛せよという教えを実現しないことになります。この要求は、実行可能なのでしょうか。「汝のごとく他人を愛せよ」がカバラの包括的法則であるという理由により、まず、カバラとは何であるのかを見極めることにしましょう。

カバラは、世界とそこに住む我々は、形而下の世界よりも上位の、人類の発展を目指す法則を実現することを唯一の目的として創造されたと説いています。したがって、我々は、創造主との類似と一致に到達できる可能性を持っています。

しかし、創造主は、何故これほど墮落した人類を創造し、人類の是正のためにかバラを与える必要があったのでしょうか。『ゾハールの書』は、この問いに次のように答えています。「他人のパンを食べる者は、与えた人の目を見るのをためらう。」

その結果、我々をこのような羞恥心から救うために世界が創造されたのです。我々は、自分自身のエゴイズムと闘い、それを正すことによって、来世を獲得するのである。

この説明のために、次のような場面を想像してください。裕福な人が、貧しい友人に久しぶりに出会いました。裕福な人は、来る日も来る日も、友人を自宅に連れて来て、食べ物と飲み物と衣服を与えます。ある日、裕福な人は、友人を喜ば

せようとして、他に何をしてあげられるか尋ねました。貧しい友人は、「私が願っていることは 1 つだけです。それは、あなたが慈悲から私に与えてくださっているすべてのものを私自身の労働の報酬として受け取ることです。あなたは、この 1 つの願望を除いて、私のすべての願望を満たすことができます。」

与える者が受け取る者の恥を取り除くことが如何に困難であるか、お分かりいただけるでしょう。その反面、貧しい人が受け取る好意が大きくなるほど、その人の恥も大きくなります。宇宙、地球、および人間社会（仕事の間）は、こうした感情から我々を救うために創造されました。我々の仕事とは、是正された願望を持って創造主の所に戻ることであり、また、当然の報いとしての報酬、すなわち、不滅、完全、創造主との合体の極めて大きな喜びを受け取ることなのです。

とは言え、我々は、何故、他者から何かを与えられたときに戸惑いや恥を感じるのでしょうか。科学者は、原因と結果の法則を理解しています。この法則では、あらゆる結果が性質においてその原因と密な関係にあり、根源において効力を持つすべての法則がその結果に受け渡されるとされています。

この法則の影響は、無生物、植物、動物、および人間という自然のすべてのレベルにおいて現れます。あらゆる無機物の状態は、それを支配する法則によって決まります。我々は、成長の過程で経験するものに慣れ親しみ、それを好みます。同様に、全体の結果を構成するあらゆる分子がその原点に引き寄せられ、根源に存在しないものはすべて嫌われ、その結果によって打ち消されます。

したがって、自然の創造者がすべての創造物の根であり源であるという理由により、我々は、創造主の内部で効力を持つ法則を喜びと認識し、創造主の中に存在しないすべてのものをまったく異質で魅力のないものと認識します。我々は、安息を好み、活動を非常に嫌うので、安息を実現するという目的がある場合にしか活動しません。これは、我々すべての原点である根（創造主）がまったく動かないものであるからです。したがって、いかなる動きも、我々の本質に相反するものなのです。

我々は、自分自身にしか配慮しない絶対的なエゴイストとして誕生し、成長します。我々は、エゴイストであることによって、あらゆる自然に活力を与える創造主と対立するようになります。しかし、我々は、社会の影響を受けるにつれて、相互の援助の必要性を理解し始めます。ただし、その手段と方向は、社会の発達レベルによって異なります。

創造主は、我々の悪意（邪悪な性癖）を生み出し、それに対抗する力としてカバラを我々に与えることにより、我々がエゴイズムの現われを排除し、恥を伴わない喜びを獲得できるようにしました。

カバラには、2 種類の法則があります。1 種類は対他人の法則であり、もう 1 種類は対創造主の法則です。しかし、そのいずれもが、我々を創造主と同様のものにするためのものです。我々が創造主のために行動するのか他者のために行動するのかということは、まったく重要ではありません。なぜなら、我々の個人的利益



の領域を越える何物も、まったく認識不可能であり続けるからです。

我々が他者のために行う活動はすべて、究極的には自己利益のためのものなので、何らかの肉体的活動または精神的活動を、それから少なくとも何らかの利益を得るという事前の意図を持たずに行うことは絶対に不可能です。この自然の法則は、「絶対的エゴイズム」として知られています。人は、形而上の法則を実現することによってのみ、他者に対する無私の愛の状態を獲得することができます。カバラの法則を実現しない人は、「絶対的エゴイズム」の領域を越える方法を何ら持っていません。

カバラによると、社会的関係を規制する法則は、創造主との関係を規制する法則よりも重要とされています。なぜなら、我々は、変化し続ける社会情勢の下でこれらの法則を実現する場合に、効果的かつ正しい方向に自己を正すことができるからです。

上述のことから、Hillel の弟子への答えを理解していただけるでしょう。つまり、主たる法則は隣人を愛することであり、その他の法則は、我々と創造主との関係に関するものも含めて、従属的な法則にすぎないのです。実際に、我々は、他者への愛に到達する前に創造主と合体することはできません。それ故に、古代の賢人は、カバラを習得するための最も安全で最短の手段として、「隣人を愛する」ことを示唆したのです。

ここで、何百万人という人口を抱える国家のすべての国民が、愛情豊かにかつ無条件に、社会の全員を助けることを強く願い、社会の全員の要求を満たしたと想像してみてください。当然、自分自身について心配したり、将来を恐れたりしなければならぬ人は誰もいないでしょう。より明確に言えば、愛ある多数の人々が絶えず彼らの利益を見守り、それらに注意を払うということです。

しかし、国家はその国民に左右されるものなので、義務の違反によって、誰かが助けを得ることができなくなり、そのために社会に孤立状態が生じます。違反者の数が多いほど、社会の全員が守らなければならない規則であるにもかかわらず違反される規則の数も増えます。全員が、他者に対して、また、法則を実現することと、それらに反することの両方に対して責任を負うのです。

もう 1 人の古代の賢人で、Rashbi (『ゾハール』の著者、ラビ・シメオン・ベン・ヨハイ (Shimon bar-Yochai) ) の息子でもある Elazar は、我々により大きな驚きをもたらします。彼は、すべての国家はもとより、全人類、すべての生き物が互いに対して責任を持っていると述べています。Elazar は、すべての国家がこの法則を実現しなければならず、これが実現されたときに全世界が是正されると述べています。すべての人が宇宙の包括的法則を受け入れない限り、世界を完全に正し、上昇させることはできません。

## 第4章 完成と世界

既に知られているように、創造主の法則の本質は、自分自身のみならず社会の全員に対する愛、すなわち最大限の心遣いと思いやりにあります。我々が創造主の法則を疑いなく受け入れることができるか否か、あるいは何らかの実際的な試験がここにも必要であるのか否かについて考えてみましょう。

私が中身の無い哲学を嫌っていることを読者の皆さんに理解していただくようお願いいたします。その理由は、誤った結論に基づいて構造全体が組み立てられ、また、誤った結論に基づいてまったく根拠のない結論が導かれるからです。我々の世代は、多くのそのような哲学が実践されるのを見てきました。根本的な理論上の仮定が誤っていることが判明したとき、理論全体が崩壊し、何百万人もの人々を苦悩に陥れる恐れがあります。

我々は、実際に得られたデータに基づいて世界とその法則を研究することによって、創造主の法則を実現したいと思えるでしょうか。我々は、自然の中に存在する秩序に従うとき、ミクロとマクロの両方のレベルの自然の支配の精密さに心打たれます。我々に最も近い創造物、すなわち人間を例にとってみましょう。父親から発せられた細胞が、母親の体内の準備の整った安心できる場所に到達し、その成長に必要なすべてのものを受け取り、ついにこの世に誕生します。その細胞は、それが別個の生命体として存在し始めるまで、いかなるものにも害されることはありません。

細胞が別個の生命体として現れたとき、自然は、子供に両親の愛と思いやりに対する絶対的な信頼を与えるよう、両親の内面にある必要な感情を慎重に呼び覚まします。人間のみならず動物や植物も、繁殖し、その子孫の成長に手を差し伸べます。

しかし、自然が種の誕生、およびその早期の個別の発達に手を差し伸べる有様と、後の生存のための闘いとの間には劇的な矛盾が存在します。世界が如何に支配されるかということについてのこうした著しい矛盾は、生命のあらゆるレベルにおいて存在し、古代以来人間の心を虜にし続け、いくつかの理論を生み出してきました。

**進化論：**この理論は、上述の矛盾についての説明が必要であると考えていません。創造主は世界を創造し、万物を統治します。創造主は無感応で、思考することができず、物理的法則に従って種を創造します。創造された種は、進化、すなわち過酷な生存の法則に従って発達します。この理論では、創造主は「自然」と呼ばれ、それによって創造主の無感応性が強調されています。

**二元論：**自然の素晴らしい知恵は人間の能力をはるかに越えるものなので、フィードバックがなければ将来の生命体を予測し設計することは不可能です。与えるもの（自然）には、当然、知性や記憶、感情も備わっています。事実、自然のあらゆるレベルが単なる偶然によって支配されていると主張できる人は誰もいません。

この理論は、正と負の 2 つの力が存在し、かつ、両方の力に知性と感情が備わっているという結論をもたらしました。それ故に、これらの力はそれらが創造するすべてのものにそのような能力を授けることができます。この理論の発達の結果、その他のいくつかの理論が生み出されました。

**多神論：**自然の行為についての解析と、それらの行為の性質に従った自然の力の分類は、それぞれ特定の力によって支配される神の集合を含む宗教（古代ギリシャの宗教など）をもたらしました。

**支配の不存在：**正確な手段と新しい方法の出現により、最近の研究では世界の各部分の間の緊密な関係が見出されています。したがって、多数の力に関する理論は見捨てられ、世界を導く賢明かつ統一された力に関する仮定がこれに取って代わりました。とは言え、こうした力の偉大さと比較して、人類は取るに足らないが故に、我々は取り残されたままになっています。

悲しいことに、人間は、世界の創造と支配に関する多数の理論とは無関係に、苦しんでいます。自然は何故、胎児と幼児には極めて優しいものであるのに、その助けをさらに必要とするとされる大人には非常に過酷なものであるのか、理解に及びません。世界に対する自然の残虐性の原因は我々ではないのかという疑問が生じます。

自然の行為のすべてが相互に関係し合っています。したがって、我々が自然の法則の 1 つに反すると、システム全体のバランスが失われます。我々が自然を冷酷で無目的な案内者と評するのか、あるいは計画、目標、および知恵を持った創造主と評するのは問題ではありません。我々は、特定の法則を持つ世界に存在しており、それらに反すると、環境破壊や社会の崩壊、また、我々自身の墮落という罰を受けます。さらに、自然の法則の間に相関関係があるため、それらの 1 つに反すると、我々自身がさまざまな方面から予想もしない苛酷な打撃を受けることがあります。

自然または創造主（この 2 つは実際には同じものです）は、我々が客観的かつ強制的とみなさざるを得ず、そのため従っている特定の法則を手段として、我々に影響を与えます。自然の法則を守らないことが我々のすべての苦悩の原因であるが故に、我々は自然の法則を理解しなければならないのです。

人間が社会的動物であることは周知の事実です。我々は、社会の中で他者の援助を得ずに生き延びることはできません。したがって、人が突然社会から孤立することを決意したならば、その人は自分自身の要求に対処することができなくなり、そのため、苦悩の人生に支配されることとなります。

自然は、我々に、自分と同類の他者と共に、またそうした他者と意思を疎通させて生きること、また、必要なすべての物を社会から受け取り、自分の労働の産物を社会に与えるという 2 つの活動を実行することを強制します。いずれの法則に反しても社会のバランスが崩れるので、そのような反則は社会の罰を受けるに値します。

受け取るものが過剰な場合（盗みなど）、社会の刑罰が直ちに下されます。人が社会に貢献することを拒否した場合、原則として、罰はまったく伴わないか、犯罪と直接関係付けられません。そのため、社会にサービスを提供することを人に義務付ける状況は、通常、刑罰の対象から外されます。とは言え、自然は偏見を持たない審判者として機能し、人間をその発達に応じて罰します。

カバラは、世界における世代の連続はタンパク質を土台とする身体の出現および消滅にすぎず、これに対して「自己」を満たす魂は消滅することなくその担体を変化させると主張しています。一定で有限の数の魂の循環、それらの我々の世界への降臨と新しい肉体における発現により、新しい世代の人々が誕生します。したがって、魂に関しては、最初から最後まですべての世代が1つの世代とみなされます。それぞれの魂が身体への／身体からの出入りを何回繰り返したかということは何ら重要ではありません。喩えて言うなら、肉体の死は、切った髪や爪が身体に生命に何ら影響を与えないのと同様に、魂にまったく影響を及ぼしません。

創造主は、世界を創造しそれらを我々に与えることによって、我々の前方に、創造主が築いた世界を登り詰めて創造主のレベルに到達し、創造主と結びつくという目標を定めました。問題は、人間が創造主の意志を実現しなければならないと感じなければならないかどうかということです。

カバラは、創造主の我々に対する支配の完全で完結した実態を明らかにします。したがって、我々1人1人と人類全体は、現在または将来の人生において、自らの意思により、または苦悩に駆り立てられて、物理的、社会的、経済的因子の影響を受けるならば、創造主の目的を自己の人生の目標として受け入れなければならないでしょう。

つまるところ、すべての意思が1つの目標に到達するのです。唯一の違いは、その過程にあります。つまり、自らの意思で意識的に目標に向かって前進する人は、1つの苦悩を得る代わりに、時間の節約と、創造主と合体する喜びの経験という2倍の利益を得ることができるのです。

現況において重大なことは、人類がその行く手に待ち構えている苦難を未だ予測できないことです。目標は既に定められており、宇宙の法則は不変です。個人の日々の苦悩と、周期的な地球規模の破局は、創造主の法則を守る必要性、すなわち、エゴイズムと羨望を捨て、その代わりに思いやり、相互援助、愛を育てる必要性を我々1人1人に認識させます。

## 第5章 意思の自由

自由に対する考え方は、我々の人生全体を左右します。とらわれの状態にある動物は、大抵、健康状態が悪化し、死に至る場合もあります。これは、自然がいかなる種類の従属も認めていないことの確かな印です。人類がある程度の自由を獲得するために何世紀にもわたって流血と戦いを繰り返してきたのは、偶然によるものではありません。

そうであるとしても、我々が自由や独立について抱いている考え方はむしろ曖昧です。我々は、すべての人が自由と独立に対する内面的要求を持っており、また、自由と独立は我々が自由に手に入れることができるものであると思いついています。しかし、我々の行動について慎重に考察すると、我々は強迫感に捕らわれて行動し、また、自由な意思をまったく持たないことに気付きます。

上述の所説には、人間は外見上、喜びと苦痛（「幸福」と「苦難」とも定義されます）という2本の手綱によって導かれているという説明が必要です。

動物には、自由な選択が与えられていません。人間は、苦痛の終点で喜びが待ち構えていると確信する場合に意識的に苦痛に耐えることを選択するという点で、動物よりも優れています。それ故に、病気を患っている人が、健康が改善されると信じて、痛みを伴う手術に同意するのです。

しかし、こうした選択は、将来の喜びと現在の苦痛を比較する実用主義的計算にすぎません。言い換えれば、この計算は、将来の喜びから苦痛の量を差し引いて、得られた差に応じて選択を行うという単純な数値演算なのです。達成された喜びが予想された喜びよりも小さい場合、喜びを感じる代わりに苦悩します。

喜びに引き寄せられ、苦痛から後退する力は、人間、動物、さらには植物までもを支配する唯一の力です。生命のあらゆる段階とレベルにあるすべての生き物が、この力によって支配されています。したがって、その意味では、自由な意思は知性に左右されないという理由で、人間、動物、植物の間に差はないのです。

さらに、喜びの種類を選択できても、強制的であり、人の自由な選択に左右されません。そうではなく、我々の選択は、社会の規範と分別によって定められ、個人の自由な選択権によって定められるものではありません。したがって、個人的な行動の自由が与えられた独立した個人などというものは存在しないことになります。

上層の支配を信じる人々は、来世における自身の行いに対する報いまたは罰を予測します。無心論者は、現世におけるそうした報いや罰を予測します。これらの人々は、自身の行為に対する報いや罰を予測するが故に、自身に選択の自由が与えられていると考えるのです。

この現象の根源は、自然全体に影響を与え、あるいはすべての個人に個別に影響を与える、原因と結果の法則にあります。言い換えれば、4種類の創造物、すなわち無生物、植物、動物、および人間は、因果法則、および目的に絶えず影響され

ているのです。それらのあらゆる状態は、それぞれが選択する予め定められた目標、すなわち将来の状態に対する外的因子の影響によって決定されるのです。

世界中のあらゆる物は、絶えず発達し続けます。これは、あらゆる物が、以下に述べる 4 つの要因の影響を受けて絶えず従前の形を捨てて新しい形を獲得することを意味します。

1. 原形
2. それ自体の本質から生じ、それ故に変えることのできない進化
3. 外的要因の影響の下で変化する進化
4. 外的要因の進化と変化

**第 1 の要因**は、原形または一次物、すなわち物の従前の形です。すべての物が絶えず変化するという理由から、従前のそれぞれの形は、以降の形に対して「一次的」と定義されます。内在する特質は、専らその原形によって決まり、以降の形を決定し、物の主要因子や、その個別の情報、遺伝子、または特質を構成します。

**第 2 の要因**は、物の原形によって決まる、因果関係のある発達の秩序です。この秩序は不変です。一例として、土の中で朽ち、その結果、新芽を出す小麦の粒を挙げます。小麦の粒は、それが完全に姿を消してその原形どおりの新たな最初の形、すなわち小麦の粒を生み出す新芽という新たな形を獲得することを運命付けられて、その原形を失います。変化し得るのは粒の数のみですが、ことによると粒の質（大きさや味）も変化するのかもしれませんが、つまり、すべての物が物の原形によって決まるという、因果関係のある秩序を認めることができるのです。

**第 3 の要因**は、外的要因との接触後にその特質を変化させる一次物の中に存在する因果関係です。付加的要因（土、水、光）が一次物の特質を補うと考えられるので、結果的に粒の量と質が変化します。

原形の力は付加的要因に勝るため、粒の量が変わることがあっても、小麦の粒から大麦の粒への変化のような、種自体の変化が生じることはありません。つまり、第 3 の要因は、第 2 の要因と同じく物に内在する要因でありながら、第 2 の要因とは異なり、質的にも量的にも変化し得るのです。

**第 4 の要因**は、偶然のような、本質の要素の外部に作用する力と近隣の物との間の因果関係です。これら 4 つの要因は、ほとんどの場合、個々のすべての物に対して、一緒に影響を及ぼします。

我々は両親の創造物であるので、第 1 の要因（原形）は我々にとって根本的なものです。我々は、両親の子孫としての彼らの複製（ある意味において）なのです。つまり、両親や祖父母の特質のほとんどすべてが、彼らの子供の中に現れるのです。先祖が獲得した考え方や知識は、無意識のレベルにおいてさえ、子孫の中に習慣や特質として現れます。遺伝の隠れた力は、子孫の行為のすべての原動力であり、世代から世代へと受け継がれます。

これは、誠実、批判、物質的満足、けち、謙虚といった、人々の中に認識するこ

とのできるさまざまな性癖を生み出します。そのどれもが、後天的な特性ではありません。それらは、むしろ、子孫の頭脳に刻み込まれた、近い先祖と遠い先祖の遺産なのです。

我々は先祖の後天的特性を自動的に受け継ぐという理由で、これらの特性は、土の中でその形を失う小麦の粒に似ています。しかし、我々の後天的特性の中には、我々の中で反対の現れ方をするものもあります。

一次物は外形を持たない力の中に現れるので、正と負の両方の特性を帯びる可能性を持っています。

その他の 3 つの要因も、我々に影響を及ぼします。人の原形から生じる、原因とその結果の秩序（第 2 の要因）は、不変です。小麦の粒は、環境の影響を受けて朽ち、徐々にその形を変え、ついに新たな麦粒が現れます。つまり、第 1 の要因が一次物の形を獲得するという事です。従前の植物と新たな芽との違いは、量と質においてのみ現れます。

人は、この世に生まれると、自己の意思に反する社会の影響を受け、社会の性質や特質を受け入れます。このように、人に遺伝的性癖は、社会の影響を受け変えられるのです。

第 3 の要因は、環境の影響に基づくものです。我々は皆、自分の好みや考え方が、時によっては社会の影響を受けて如何に覆され得るかを知っています。そのようなことは、自然の無生物、植物、動物のレベルでは決して起こることがありません。これが起こるのは、人間の場合に限られます。

第 4 の要因は、一次物の発達の連続的秩序と何ら関係のない負の外的要因（困難や不安）の直接および間接の影響です。

我々の思考と行動はすべて、これら 4 つの要因に左右され、生活様式全体を定めます。我々は、焼物師の手の中の粘土のように、これら 4 つの要因の影響に支配されます。したがって、願望の自由が存在しないこと、すべての物が専らこれら 4 つの要因の間の相互作用に左右されていること、また、我々がいかなる支配力も持たないことが分かります。いかなる科学的理論も、形而上の世界が内側からどのように物を支配するのか、また、何処が肉体と魂の媒介となるのか、あるいは何が肉体と魂の間に介在するのかについて答えを見出していません。

カバラは、あらゆる世界においてかつて創造されたすべての物が、光とそれで満たされた器から成り立っていると説いています。創造主から直接発せられる光を受け入れる意思を持つ器こそ、唯一の創造物なのです。器に生命と喜びをもたらす光を受け入れるこうした意思は、人の願望の強さに応じて、形而上および形而下の実体となります。

すべての創造物の中の性質、特質、および量の違いは、こうした願望の程度にあり、こうした願望はそれに応じて、生命を与える創造主から発せられる光によって満たされます。

1つの物を他の物から切り離し、色、内容、波、およびその他の差別化要因を生み出すものはすべて、受け入れる意思の力と、それ故にそれを満たす光の量の力から生じます。つまり、ある大きさの願望が無機質という形態をもたらし、異なる大きさの願望が液体、色、または波を形成するのです。我々とすべての世界を抱擁する光の量が等しく不変であるのに対し、すべての物が願望の規模に基づく地位に左右されます。

我々は、ここで、個人の自由についての問いを明確にすることができます。我々は既に個々の物が特定の量の創造主の光を受け入れる意思から成り立っていることを理解しています。したがって、その願望に特有のすべての特質は、専らこの願望の強さ、すなわち光を引き付ける力に左右されることが分かります。

一般に「自我」と呼ばれる引力は、我々に自分の存在のために努力することを強制します。我々が自我の願望や欲望の1つを破壊すれば、その潜在的「器」を使用する機会がそれに与えられないこととなります。潜在的「器」とは、その実現が創造主によって与えられた権利である器をいいます。

我々は、自己のあらゆる考えを、環境の影響を通して獲得します。なぜなら、麦粒は、土、すなわちそれに適した環境の中でしか育たないからです。したがって、自己の社会、すなわち友人の輪の選択肢が、我々の人生における唯一の選択なのです。我々は、自己の環境を変えると、必ず自己の考え方を変えます。なぜなら、個人は、その社会の単なる複製、産物であるにすぎないからです。

これを理解する人々は、人は社会の産物であり、その肉体はその考えによって統御されないの、人は意思の自由を持たないという結論を導きます。むしろ、外部の情報が頭脳の記憶域に格納され、頭脳は、鏡のように、環境の中で生じたあらゆる事象を反映するにすぎないということです。

我々の起源は、我々の根本的な一次物です。我々は、自己の願望と性癖を受け継ぎ、こうした継承物こそ、1人の人と他の人を区別する唯一の物なのです。すべての人が、様々に社会の影響を受けます。それ故に、我々は、2人として同じ人を見出すことができないのです。

この一次物が個人の真の財産であり、人はそれを変えようと試みてはならないことを理解してください。なぜなら、人は、その固有の特質を発達させることによって個人というものになるからです。

したがって、1つの衝動または熱望さえも排除する人は、世界の中に空虚をもたらします。この衝動や熱望は、いかなる他人の肉体においても再現されません。このことから、自国の文化を他の国家に押し付けてその土台を破壊した「文明国」がどのような罪を犯したかを理解することができます。

しかし、社会の中で完全な個人の自由を確保することは可能なのでしょうか。社会は、正常に機能するために、当然その法則、規制、および規範を個人に課さなければなりません。その結果、人は絶えずその社会と闘い続けることとなります。ここで、より辛辣な要点が思い浮かびます。多数派が社会の規則を定める権利を



持ち、その集団の社会における発達度が常に発達度の最も高い人々のそれよりも低いとしたら、この世界には発展の代わりに後退が生じます。

社会が形而上の法則に従ってその法則を定めるならば、それを守る人々は、個人として創造主と合体する機会を失いません。なぜなら、このような法則は、世界と社会に対する統治の自然法則であるからです。社会が形而上の本質を備えた法則に反する独自の法則を生み出したとしても、形而上の法則を守る人々は、その最大限の発達を遂げるでしょう。

個人と社会が正しい方向に発展するために、我々は目的のある統治に従って自然の法則を守らなければなりません。カバラは、我々は社会の意見に従ってあらゆる決断を下さなければならないと説いています。カバラは我々に、日常生活において多数派の意見を受け入れなければならないこと、また、形而上の発達過程において発達度の高い個人の意見に従わなければならないことを教えています。

この規則は、「統治の自然法則」と呼ばれます。カバラの科学の規則と法則はすべて、自然の統治の法則から成り立っています。カバラを通して上層から我々の世界に影響を与える法則の間の相互の関係を研究するうちに、社会における多数派の影響の法則が自然な法則であることが明らかになります。

## 第6章 カバラの本質と目的

- カバラの本質は何であるのか。
- カバラの目的は、この世の人生を対象としているのか、あるいは将来の人生を対象としているのか。
- カバラから利益を得るのは、創造主、またはその創造物のどちらであるのか。

創造主に到達するカバリストは、創造主が絶対的に慈悲深いと感じます。創造主の中には、あらゆる不満感の原因である、自分自身のために楽しむ意思が存在しないので、創造主はこの世の誰にもごくわずかな苦痛さえもたすことができないと、カバリストは説いています。

我々は、専ら自分自身の何かに対する願望を満たすために他人に害を与えます。この感情が絶えず人に取り付かなかつたら、この世における悪の根拠は存在しないでしょう。我々は、創造主を絶対的に完全であり、すべてであると認識します。したがって、創造主の中に「獲得する」意思が存在しないことの結果として、創造主の中にいかなる悪も存在しないこととなります。

この場合、創造主は、我々にとって絶対的に慈悲深いものとして映るはずです。この慈悲深さこそ、楽しさ、喜び、および充足の瞬間に我々すべてを捕らえる感情なのです。しかし、我々が感じるすべてのものが創造主から生じるものであるという理由から、創造主の創造物はすべて、幸福と思いやりだけを感じなければならぬことになるにもかかわらず、我々はそれらの代わりに何を感じるのでしょうか。

自然全体は、無生物、植物、動物、および人間の4つのレベルから成り立っています。それぞれのレベルに目的のある発達が生じ、各レベルがゆっくりと徐々に、因果関係を持って成長します。これは、木の上で成長し、成熟の最後の時期にのみ魅力的で食べることができるようになる果物に似ています。

しかし、果物はその生長の最初から最後までの間を経験する中間状態はいくつあるのでしょうか。中間状態からは、果物の最後の状態や、果物が熟して甘くなる時期を知ることはできません。中間状態では、最後の時期と反対のことが起こります。つまり、果物は、それが熟すまでの過程では、成長の最後に熟した時期の美味しさと同じくらいの苦味と固さを持っているのです。

動物の世界でも同じことが起こります。動物の知的能力の成熟には限界があるとは言え、人間の子供と比較して、その限界は成長に伴って目立たなくなります。例えば、生後1日の子牛は、完全に成長した雄牛の特質をすべて備えています。後に子牛の成長が実際に止まったとき、人生の最初の1年間はまったく役に立たず不憫であり、人生の全盛期に知性を獲得する人間と反対の事態が生じます。

この差があまりにも著しいために、我々の世界の在り方を十分に理解していない人は、生まれて間もない子牛と新生児を考察することによって、子牛が少なくと

も新たなナポレオンにはなれるくらいに成長する可能性を持つのに対し、人間の新生児からは価値あるものが何ら生じないという結論を出すでしょう。

概して、中間状態は最終的な結果に反するものです。したがって、最終的な結果を知る人のみが、物の発達過程におけるその魅力のない形態を受け入れ理解することができるのです。それ故に、人々はしばしば、最終的な結果を予測できずに、誤った結論を導いてしまうのです。

実際に、創造主が我々の世界を統治する方法は、意味深いものであり、発達の最後の時期にのみ姿を現します。創造主は、その我々に対する姿勢において、悪の形跡のない「絶対的善」の原理によって支配され、創造主の統治の目的は、我々の徐々の発達において明示されます。我々は、最終的に、我々のために準備されたすべての善を受け入れることができるようになります。この目標は、確かに、創造主の計画に従って達成されるのです。

我々には、正しい方向の発達の2つの道が準備されています。

- 我々が逃れざるを得ない苦悩の道。我々には到達地点が見えず、我々は苦痛から逃れることを強いられます。この道は、「無意識の進化」または「苦痛の道」と呼ばれます。
- 望ましい結果への迅速な到達を促すカバラの手法に従うことを手段とする、意識的で苦痛を伴わない、迅速な形而上の発達の道。

カバラの手法を使用する発達のすべての法則の目的は、我々の内面に存在する善と悪を認識し、悪の認識を育てることです。我々は、形而上の法則を守ることによって、自分自身からすべての悪を取り除くことができます。なぜなら、人の発達度の違いによって、悪に対する認識が深くなったり表面的になったりし、また、自己から悪を取り除く願望が強くなったり弱くなったりするからです。

すべての悪の根源は、我々のエゴイズムです。なぜなら、エゴイズムは、我々に善のみを授けることを願う創造主の本質と対立するものであるからです。我々が喜びとして認識するものはすべて、創造主から直接与えられたものです。したがって、創造主に近いことは喜びとして認識され、創造主からの遠さはその程度に比例して苦悩と認識されるのです。

創造主がエゴイズムを嫌悪するので、人間もまた、その発達の程度に応じてエゴイズムを嫌悪します。エゴイズムに対する態度は、広範に及びます。エゴイズムを無制限に（公然と盗みや殺人を犯すという墮落したレベルまで）利用する精神的に未発達の人の内面における、当然のこととしてのエゴイズムの許容から、発達度の高い人の、エゴイズムを公然と示すことに対する恥の感情や、精神的に発達した個人の内面にあるエゴイズムに対する実際の嫌悪までに及びます。

したがって、本章冒頭の問いに対する答えは次のようになることが分かります。

- カバラの本質は、人が苦痛を伴わない実際的な方法で発達の究極レベルに到達できるようにすることである。

- カバラの目的は、人がこの世において自分自身に対して行った精神的努力に応じて究極レベルに到達することである。
- カバラが創造物に与えられたのは、創造物の幸福をもたらすためではない。カバラは、自己完成のための教えとして与えられた。

## 第7章 『ゾハールの書』の後書きより

カバラは、形而上の法則の正しく一貫した遵守が創造主との結合をもたらすと説いています。しかし、「結合」とは何を意味するのでしょうか。実際には、時間、3次元空間、および肉体的欲求の制約のために、我々の思考では創造主を理解することができません。したがって、我々の思考がこれらの制約に束縛される限り、我々は客観的になり得ません。

我々がエゴイズムを超越したとき、受け入れる意思と、時間、空間、および運動の定義が変化し、それらは形而上の次元を獲得します。そのような状態では、我々が自己の受け入れる意思を支配し、そうした意思が我々を支配することはありません。その結果、我々の思考は、受け入れる意思に依存せず、それ故に客観的となるのです。

上述の理由から、カバラは、創造主に近づく手段として、特質および行動について創造主と同等である状態に到達することを提案しています。「創造主の行為と結合しなさい」、「創造主と同じくらい親切で、思いやり深く、謙虚でありなさい」とカバラは説いています。しかし、人はどのようにして、創造主の行為と創造主自身が同じであると確信できるのでしょうか。また、何故自分が創造主の行為を模倣して創造主と合体しなければならないのでしょうか。

形而下の世界では、合体、結合を物体間の距離の短縮として想像し、分離を物体が互いに離れることとして理解することができます。しかし、形而上の領域には時間、空間、運動のような概念は存在しません。それ故に、2つの形而上の物の間の特質の同等性が、それらの物を互いに引き寄せ、特質の相違がそれらを引き離すのです。（空間において結合や分離が生じるのとは対照的に）結合や分離が生じることはありません。なぜなら、形而上の物自体は、いかなる場所も占めないからです。

形而上の物の中に新たな特質が現れると、斧が物体を分割するように、それが2つの部分に分割されます。すなわち、形而上の物は、特質の相違がわずかであれば互いに近いということになります。特質の相違が大きくなるにつれて、それらの間の隔たりも大きくなります。それらが互いに愛し合えば、精神的に「近く」なり、それらの有形の殻の間の距離は、重要性を持たなくなります。それらの間の関係は、それらの形而上の親和力によって決定されるのです。

ある人が、他者が嫌う物を好む場合、彼らの間の距離は、彼らの考え方と感覚の相違によって決まります。2人のうちの1人が、もう1人が嫌うもののすべてを好む場合、彼らは完全に対立するとみなされます。

したがって、形而上の世界（願望の世界）では、志望、願望、考え方、および特質の類似性または相違が斧の役割を果たし、形而上の世界を分割することが分かります。形而上の物の間の距離は、それらの感覚と特質の不一致の程度によって決まります。

したがって、創造主の意思、感情、および思考に従うことによって、我々は創造主に近づきます。創造主の行為は、専らその創造物に資するためのものです。それ故に、我々も、我々の仲間が健康で、創造物のすべてに対して善良であることを願わなければなりません。我々は物質的な世界に存在しているため、肉体の生存に必要な最小限の物は、エゴイズムの現れとはみなされません。

我々は、絶対的な無私無欲をもって他者に利することができるのでしょうか。結局、創造主は我々を、楽しむ意思を持つ絶対的エゴイストとして創造したのです。我々は、自己の性質を変えることはできず、互いに対して善良であることをもってしても、意識的または潜在意識的に自己のために利益を得ようとするでしょう。我々は、何らかの自己利益を認めない限り、他人のためにはごくわずかな行動でさえ起こすことができないのです。

事実、人はその絶対的エゴイズム性を変えるには非力であり、ましてや、それを完全に反対のもの（見返りとして名誉、安息、名声、健康、または金銭を得ることなく善良でいること）に変化させるにはなおさら非力です。それ故に、カバラを通して形而上の法則を守る方法が与えられたのです。我々の性質を変え得る手段は他に一切ありません。

身体とその器官は、1つの全体を構成し、感覚と情報を絶えず交換します。例えば、身体の一部が身体全体の全般的な状態を改善し得ると身体が感じたら、その部分は直ちにそれを感じ、この意思を実現します。身体のある部分が苦しんでいる場合には、身体全体がすぐさまそれを察知し、その状態を改善しようと試みます。

この例から、創造主との合体を達成する、人の状態（むしろ魂の状態と言うべきかもしれません）を理解することができます。身体という衣服をまとう前の魂は、創造主と合体した1つの全体であることが一見して分かります。しかし、魂は、一旦身体の中に納められると、創造主の特質と身体の特質の違いのために、それ自身を創造主から完全に切り離します。

これは、創造主が、魂にエゴイズムの感覚を与えることによって創造主自身とは別のものを創造したことを意味します。なぜなら、形而上の世界では願望の相違によって物が引き離されるからです。したがって、物（魂）とエゴイズム（身体）は別個の部分になります。同様に、人は、身体から切り離された器官のように、創造主から遠ざかります。人と創造主は、互いに離れすぎているので、人は創造主をまったく感じることはできません。実際、距離が大きすぎるために、人は創造主を知らず、それを信仰することしかできないのです。

したがって、我々は、我々の特質を創造主と同等にすることによって（すなわち、形而上の法則を守り、我々を創造主から切り離すエゴイズムを愛他主義に変えることによって）創造主との合体を達成すれば、創造主の思想と願望を実現することができます。我々はまた、創造主の思想としてのカバラの神秘が宇宙の神秘であることを明らかにします。

カバラには、2つの部分があります。1つは明らかにされた部分であり、もう1つ

は隠された部分です。その両方が創造主の思想を構成します。カバラは、上層世界からエゴイズムの海でおぼれている人に向かって投げられたロープに喩えられます。人は、形而上の法則を守ることによって、それらを守る人とそれを強いる人が精神的に合体する第2の主要段階に備えるのです。

形而上の法則を守る人々は、Nefesh、Ruach、Neshama、Haya、および Yechida の5つのレベルを通過します。各レベルは、5つの下位レベルから成り、それらの下位レベルはさらなる5つの下位レベルに分けられます。精神的上昇、すなわち創造主への接近の梯子は、合計125の段から成ります。この梯子の主要段階は、「世界」と呼ばれます。それらの下位レベルは「Partzufim（相）」と呼ばれ、セフィロートから成ります。

ある形而上の世界に存在する物はすべて、その世界とそれより下位の世界に存在する物を認識します。しかし、それらは、その世界よりも上位の世界からもたらされる物については、想像したり感じたりすることさえできないのです。したがって、125のレベルの1つに到達した人は、そこに存在する過去、現在、および将来の世代からの魂を獲得し、それらと共にそこに留まるのです。我々は、我々の世界にのみ存在し、それ故に他のレベルや世界に存在する物や、そうしたレベルや世界に住む人々を想像したり感じたりすることがまったくできないのです。

創造主への道の途上のあるレベルに到達したカバリストは、そのレベルを、そこに到達した人だけが理解できる表現を用いて説明します。言及されたレベルに到達していない人々は、そのような説明によって混乱し、正しい理解から遠ざかります。

上述したように、我々の創造主への道は、125のレベル／等級に分けられますが、人は、自己の是正を成し遂げる前にそれらのすべてを登り詰めることはできません。完全に是正された最も新しい世代とその他すべての世代との間には、2つの違いがあります。

1. 最も新しい世代においてのみ、125のすべてのレベルへの到達が可能になります。
2. 過去の世代では、小数の人しか他の世界に到達することができませんでした。最も新しい世代では、皆が形而上のレベルを経て上昇し、創造主と合体することができます。

「最も新しい世代」とは、1995年以降の人類のすべての世代をいいます。なぜなら、『ゾハールの書』によれば、その年に人類が新たな段階、すなわち「最後の是正」の段階に入るからです。カバラでは、この時代を、人類が最も低い状態から脱出するよう運命付けられた「解放の時」とも呼びます。

Rashbi と彼の弟子は、125のすべてのレベルを登り詰めました。それ故に、彼らは世界の125のすべてのレベルを包含する『ゾハールの書』を記すことができたのです。その結果、『ゾハールの書』には、それが「時代の結末」、すなわち是正の最後の日の前夜に明らかにされるであろうと記されています。他の世代は、是

正の結末に到達することができませんでした。したがって、彼らは、『ゾハールの書』の著述の動機となった 125 のすべてのレベルを乗り越えることができなかつたが故に、この書を理解することができなかつたのです。我々の世代では、皆が 125 番目のレベルに到達することができ、その時に皆が『ゾハールの書』を理解することができるのです。

現代のカバリストが『ゾハールの書』について十分に注釈することに成功したという事実は、我々が最も新しい世代の入り口に立っており、また、誰もが『ゾハールの書』を理解できるということの印です。実際に、我々の時代よりも前に発表された『ゾハールの書』についての注釈は 1 つとしてありません。今日、我々は、Baal HaSulam が書いた、『ゾハールの書』についての明確かつ完全な Sulam の注釈を入手することができ、最も新しい世代においても同様であるに違いありません。

しかし、我々は、形而上の行為は物理的行為と同様には生じないこと、すなわち原因と結果が伴わないことを理解する必要があります。我々の時代の各世界の形而上の状態は、救世主（創造物をエゴイズムから引き離し、それを愛他主義に至らしめる力）の到来を待ち構えています。しかし、これは我々に達成の機会を与えるにすぎず、それに対して、実際に達成できるか否かは我々自身と我々の精神レベルによって決まるのです。

我々は、我々の特質、願望、および目標を創造主のそれらと同等にすることによって、すなわちエゴイズムを完全に捨て、無私無欲で善行を行うことによって、創造主と合体することができます。とは言え、完全なるエゴイスト（個人的利益がもたらされない限り、精神的活動や肉体的活動を行うことができない人）は、他者のために生きる利点と動機を何処に見出すのかという疑問が生じます。

生活からの一例を挙げると、この疑問に対する答えを容易に理解できます。

あなたが、あなたの眼に大切に映る人、すなわちあなたが愛し尊敬する人に贈り物をしたいと心から願っている場面を想像してみてください。この人があなたの贈り物を受け取ること、あるいはあなたの家に食事に招かれることに同意したとします。

あなたは、お金を使い、一生懸命働いて大切な来客を十分にもてなします。それにもかかわらず、あなたは、それが自分のためではなく、あなたのもてなしを受けることに応じてあなたの願いを聞き入れ、あなたを楽しませる来客のためであるかのように、もてなすことを楽しみます。したがって、我々が創造主を自分が尊敬する人であると想像すれば、我々は喜んで創造主を喜ばせるでしょう。

我々は、創造主の偉大さに到達した場合に限り、宇宙の法則を守ることができます。我々が創造主のために努力し、創造主の崇高さに到達したとき、我々は創造主からそれを受け取ったかのように感じられるのです。

しかし、思考は社会と社会環境の影響に左右されるため、社会が賞賛するすべてのものも、個人の眼に上昇したものとして映ります。したがって、最も重要な



ことは、できるだけ多くの創造主を褒め称える人々の仲間に入ることです。

我々の環境が創造主を適切なレベルに高めなければ、我々は精神性を獲得できないでしょう。学生は、すべての学生のうちで最も未熟であるように感じるはずで、このようにして、学生は社会の考え方を吸収し、そのような状態において、学生は社会の考え方を重要と考えるのです。こうした理由により、「自分のために友人を受け入れよ」という自明の理が生じるのです。実際に、自分の意見で私に影響を与える人が多いほど、私は勤勉に自分自身への治療、つまりエゴイズムの是正に取り組むことができ、創造主を感じることもできるのです。

すべての人が根、すなわちその人の魂の源に到達しなければならないと言われて、います。つまり、最終目標は、創造主と完全に合体することです。創造主の特質は、セフィロートと呼ばれます。それ故に、セフィロートとその行為を研究する間に、これらの特質を学び、それらと合体し、創造主の精神と一体化し、創造主と合体したかのように感じられるのです。

我々は、カバラを研究することによって、世界がどのように創造されたのか、また、世界がどのように支配されているのかを学び取ります。これがカバラの重要性の所以です。我々は、創造主の行為と特質を研究することにより、創造主と合体するために我々がどのようにしなければならぬのかを見出します。

## 第8章 カバラの言葉

我々の語彙は、時間、空間、運動の概念と結び付いた、世界に対する我々の認識によって制限されています。そのため、我々は、形而上の概念を表現し伝達するための言葉を持っていません。我々は、この世に存在する物から我々の語彙全体を発達させてきました。したがって、この世の言葉を使用して形而上の現象に名前を付けたいと思っても、そのような言葉では不十分です。

精神性を一度たりとも感じたことのない人に精神性の経験を説明する言葉を見つけることは困難です。我々は、形而上の物を説明したいと思うことがあるにもかかわらず、形而下の言葉だけをもってそれに名前を付けなければなりません。言葉の中に正確な対応を見出さない概念が1つでもあれば、科学全体の正しい意味が損なわれることとなります。このように、形而上の世界を説明するための適切な言葉や言語を持たずに形而上の世界に関わるという問題は、未解決のままです。

我々の世界のすべての物と行為は、形而上の世界における対応する物と行為に源を発しています。それ故に、カバリストは、互いに情報と知識を伝達するための信頼性の高い方法を見出したのです。カバリストは、我々の形而下の世界における物と行為（枝）の名前を使用して、形而上の世界における対応する物と行為（根）を説明するのです。

この言葉は、我々の世界に住みながらも形而上の世界に到達し、こうした対応を理解した人々によって育てられました。それ故に、カバリストは適切にそれを「枝の言葉」と名付けたのです。

このことから、我々は、カバラ関連の書物に見られる奇妙な名前、すなわち、我々が奇妙な物語または子供向けのおとぎ話として認識する行為の記述を理解することができます。それにもかかわらず、この言葉は極めて正確です。なぜなら、それぞれの根とその枝との間に正確で固有の対応が存在するからです。

枝の言葉の創造者が形而上の世界と形而下の世界の両方に同時に存在するので、そのような対応が存在するのは当然です。それ故に、1語たりとも置き換えることはできず、いかに不条理であろうとも、枝は根に正確に対応しなければならないのです。

形而上の物を引き離すのは、空間ではなく、それらの形而上の不一致と特質の相違です。それ故に、魂、すなわち個別の形而上の物の数によって、物質界の人々の数が決まるのです。

創造の初期には、最初に、1つの合体した魂、すなわち光（喜び）とそれに対応する肉体（願望）であるアダムが存在していました。これらは、忠実に創造主と合体していたので、最大限の喜びを受け入れていました。魂の本質は、喜びを受け入れる意思にすぎず、魂はその願望に応じた喜びで満たされていました。しかし、喜びを受け入れた途端、魂は恥を感じました。我々の世界では、贈り物や好意を受け取る人のすべてが、同様の感情を抱きます。

恥の感覚の程度は、人の精神的発達度によって異なります。この感情は唯一、我々を絶えず制約の範囲内に留め、我々に社会の法則を守ることを強要します。同じ感覚が、知識、豊かさ、社会の認知、および名誉に対する願望の根底に存在します。

魂は、受け取った喜びに対応する燃えるような恥を感じた途端、それを取り除く唯一の方法は喜びを享受するのを止めることだと気付きました。しかし、創造主の願望は魂を喜ばせることであったので、魂はこの喜びを、それ自身のためではなく、専ら創造主のために受け入れることに同意したのです。

我々の世界でも同様に、「お母さんのために食べてあげている」というような、子供が食事から得る楽しみが大きいほど、子供がその母親に与える満足も大きくなります。こうした状況では、魂は、受け取る喜びの量を絶えず調整して、専ら創造主のために楽しまなければならないのです。

しかし、合体した魂は、それ自身のために楽しみたいというその自然な願望にすぐに打ち勝つことができなかつたので、打ち砕かれて無数のかけら（魂）になりました。こうしたかけらの方が、利己的な楽しむ意思を処理しやすく、制し易いのです。

形而上の世界には距離というものがないので、近さは行為と思考の類似性（親近感、愛）によって決まります。「創造主のために」喜びを受け取る魂が創造主に近いのです。なぜなら、そうした魂と創造主は、母親と子供のように、互いに喜ばし合うからです。

近さは、魂が創造主のために受け取る喜びの大きさによって決まります。我々の内面では喜びを受け取る意思が本能的に働きますが、自分から恥を取り除き、「創造主のために」楽しむ願望もそこから生じます。したがって、自己から恥を取り除き、「創造主のために楽しむ」願望は、特別な絶えざる努力を要求します。それ自身のために喜びを受け取る魂は、その意図と形而上の行為において、授ける者と対立します。魂が利己的に受け取る喜びが大きいほど、創造主との対立も大きくなります。

願望の相違が人を創造主から遠ざけるという理由から、我々の世界との遠さのさまざまなレベルで、さまざまな世界が形成されました。ここでは、合体した魂のすべての部分に、一定の長さの時間〈寿命〉と繰り返し生じる機会（ライフサイクル）が是正のために与えられました。

人は、専ら自分自身のために喜びを受け取る意思を持って生まれます。我々の「個人的」な願望はすべて、不純な力のシステムに源を発するものです。言い換えれば、我々は、創造主から無限に遠い所に存在し、創造主を感じる事ができず、また、それ故に「精神的に死んでいる」とみなされるのです。

しかし、人が自分自身と闘いながら、専ら他人と創造主のために生き、考え、行動する願望を獲得したなら、その人は、そうした魂の浄化によって、創造主に徐々に近づくことができ、最後に創造主と合体できます。また、人が創造主に近

づくにつれて、その人が感じる喜びが大きくなります。

我々の世界と形而上のすべての世界（創造主への道の途上にある階段）が創造されたのは、こうした魂の変化を生じさせるためなのです。創造主との合体は、すべての人が我々の世界に生存している間に成し遂げなければならない課題なのです。

我々の世界は、創造主との対立、すなわち創造主の特質との対立が最も大きい所です。我々は、利己的な楽しむ願望を自分自身から取り除くことによって、創造主に近づき、その結果、二重の喜びを得ることができます。つまり、創造主から喜びを得ることを楽しみ、同時に、創造主を喜ばせることを楽しむことができるのです。同様に、私が母の料理を食べるとき、私は食事を楽しみ、また、母がそれに満足することを喜ぶのです。

利己的な喜びが短命で、欲求の大きさによって制限される（2人分の食事を取ることはできません）のに対して、他者のためには無限に与え、共有し、または受け取ることが可能であることに留意しなければなりません。したがって、人が受け取る喜びは無限です。

魂に無限の喜びを授けるための創造主の唯一の計画の下で、創造のすべての世界（我々の世界も含めて）がそこに住むすべてのものと合体します。この唯一の考え、すなわち目標は、創造の始まりから終わりまでの全部を包含します。我々が感じるあらゆる苦悩、我々の自己に対する治療、および報いは、専らこの考えによって決定されるのです。

個別の是正が行われた後、すべての魂がかつてのように1つの魂に再び合体します。したがって、それぞれの魂が受け取る喜びは、喜びを受け取ることと創造主を満足させることによって2倍になるにとどまらず、再び合体した魂の数で掛けたものとなるのです。

一方、自分自身に治療を施す人々が精神的に上昇するにつれて、その人々の眼が開き始め、別の世界が見えるようになります。それ故に、彼らはこの世に生存している間にすべての世界に到達できるのです。彼らにとっては、カバラの一見不条理な言葉が、行動、思考、および感覚の言葉になります。その時に、我々の世界の対立する概念が、1つの天上の根となるのです。

## 第9章 『ゾハールの書』の前書きより

『ゾハールの書』は、誕生の日以来、知識のない人々に秘密にされてきました。今日、この書を一般の人々に公開する状況が整いました。すべての読者が『ゾハールの書』を手にとることができるようにするのに先立ち、いくつかの説明を示さなければなりません。

まず、『ゾハールの書』に記されていることはすべて、ケテル（王冠）、コクマー（知恵）、ビナー（理解）、ケセド（慈悲）、ゲブラー（峻厳）、ティファレト（美）、ネツァク（勝利）、ホド（栄光）、イエソド（基礎）、マルクト（王国）という10個のセフィロートの秩序と、それらの組み合わせであることに留意する必要があります。何らかの考えを限られた数のアルファベットで表すのと同様に、10個のセフィロートの組み合わせで、形而上のすべての行為または物を十分に説明できます。

ただし、物質（Matter）、物質中の形態（Form in Matter）、抽象的形態（Abstract Form）、および本質（Essence）といった、我々の世界における4つの認識（または到達）レベルと結び付いた明確な境界が3つあります。これらの4つの到達レベルは、10個のセフィロートの中にも存在するのです。

**第1の境界：**『ゾハールの書』は、物質と物質中の形態のみを解明するものであり、抽象的形態と本質には何ら関係しません。

**第2の境界：**創造されたすべてのものは、3つのレベルから成ります。

1. Ein Sof（無限）の世界
2. Atzilut（発散）の世界
3. Beria（作成）、Yetzira（形成）、および Assiya（行為）の世界（BYA）。

『ゾハールの書』は、最後の3つ世界、BYAのみを解明するものです。この書は、Ein Sof（無限）の世界と Atzilut（発散）の世界を本質的にも、それ自体としても解明せず、専ら BYA の世界が Atzilut（発散）および Ein Sof（無限）の世界から受け取るものを解明します。

**第3の境界：**BYAの世界は、それぞれ3つのレベルから成ります。

- 各世界において創造主の部分構成する10個のセフィロート
- 人間の魂
- 存在するその他すべてのもの：Mala'achim（天使）、Levushim（衣服）、および Heichalot（宮殿）

『ゾハールの書』は、人間の魂について解明しています。一方、その他すべての物は、人間の魂に関してのみ解析されています。すべての誤り、間違い、妄想がこれら3つの境界を越えた結果であることは注目するに値しません。

以下のセフィロートは、概説した 4 つの世界（Atzilut（発散）、Beria（作成）、Yetzira（形成）、Assiya（行為）の各世界（ABYA））に対応します。

- コクマー（知恵）のセフィラは、発散の世界に対応します。
- ビナー（理解）のセフィラは、作成の世界に対応します。
- ケセド（慈悲）からイエソド（基礎）までの 6 つのセフィロートは、ティフェレット（美）と総称され、形成の世界に対応します。
- マルクト（王国）のセフィラは、行為の世界に対応します。

発散の世界よりも上位の世界に存在するものはすべて、ケテル（王冠）のセフィラに該当します。

しかし、上述の世界のそれぞれも、10 個のセフィロートに分けられます。任意の世界における無限に小さな物でさえ、10 個のセフィロートに分けられます（10 個のセフィロートから成ります）。

『ゾハールの書』では、各セフィラが固有の色を持っているとされています。

- 白はコクマー（知恵）のセフィラに対応します。
- 赤はビナー（理解）のセフィラに対応します。
- 緑はティフェレット（美）のセフィラに対応します。
- 黒はマルクト（王国）のセフィラに対応します。

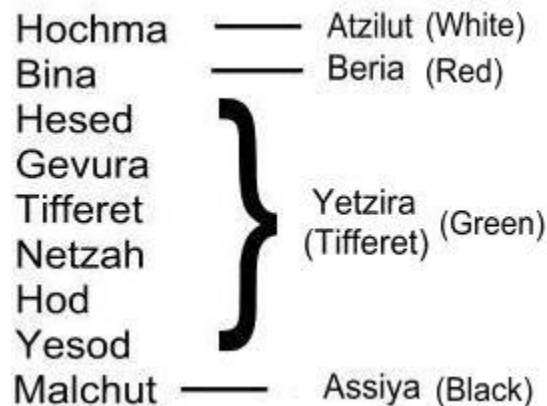


図 2

セフィロートを満たす光は無色でありながら、受け取る人に見える光はそのセフィラに対応する色合いを帯びています。したがって、5 つの世界（Ein Sof（無限）の世界から我々の世界まで）では、創造主から発散された光は、完全に無色で知覚不可能です。光がカラー・フィルタを通り抜けるようにこれらの世界とセフィロートを通り抜けた後にのみ、我々はその光を、それを受け取る魂のレベルに応じた特定の色と強さを持つ物として認識するのです。

例えば、発散の世界は、光にまったく色を付けずに光を通過させます。なぜなら、

この世界は光の特質に似た特質を持っているからです。それ故に、発散の世界の光の色は、白と定められているのです。その他の世界の特質は、光の特質とは異なります。したがって、それらはそれぞれ、光とそれとの形而上の近さに応じて光に影響を与えます。

白い光を紙に喩えると、その上に書かれたメッセージは情報を示し、その色が白い背景から浮き上がります。同様に、赤、緑、および黒を知覚することによって、光を知覚できるのです。

発散の世界（コクマー（知恵）のセフィラ）は、書物の白い背景なので、我々はそれを理解することができません。しかし、ビナー（作成の世界）、ティフェレト形成の世界）、およびマルクト（行為の世界）は、それぞれ赤、緑、および黒に対応し、それらの結合、相互作用、および発散の世界から我々の世界に向かって通過する光に対する反応に基づいて、我々に情報を提供します。

したがって、Beria（作成）、Yetzira（形成）、および Assiya（行為）の世界は、Atzilut（発散）の世界の同心円状の覆いを形成していると喩えられます。ここで、物（object）の4つの種類の達成、すなわち物質（Matter）、物質中の形態（Form in Matter）、抽象的形態（Abstract Form）、および本質（Essence）について調べてみましょう。

この場合の物（object）を嘘つきの人とします。

- 物質（Matter）とは、その人の身体です。
- 物質中の形態（Form in Matter）とは、欺瞞さという特質です。
- 抽象的形態（Abstract Form）とは、物質とは無関係に認識された欺瞞さです。
- 本質（Essence）とは、その人の本質（これは、身体から切り離されると、まったく想像不可能なものになります）です。

我々は、本質それ自体を、何らかの空想でそれを補ったとしても、我々の感覚器官を働かせて想像することができません。我々が達成できるのは、周囲の実体に対する行為と反応、および本質との相互作用に限られています。例えば、ある物を検査するとき、目は物自体を知覚するのではなく、物と光の相互作用（むしろ光と目の相互作用と言うべきかもしれませんが）を知覚するのです。我々の聴覚器官は、音を知覚するのではなく、波動と我々の聴覚器官の相互作用を知覚するのです。我々の味覚器官は、食物そのものを知覚するのではなく、唾液や末梢神経や腺と食物との相互作用を知覚するのです。

我々の感覚はすべて、本質の反応の相互作用のみを明らかにし、本質そのものは明らかにしません。我々に物の固さや温度の情報を与える触覚でさえ、物自体を明らかにするのではなく、我々が、それに触れたりそれを感じたりすることに対する自分の反応のみに基づいてそれを判断できるようにしているのです。

したがって、世界の最高の達成は、本質が我々にどのように影響を及ぼすのにかに

ついでの研究において見出されます。しかし、我々は、自己の極めて取り留めのない空想においてできえ、本質というものを、それを一度でも感じたことがなければ思い描くことができません。我々には、心象と、それを研究する願望が欠けているのです。

さらに、我々は、自分自身、自分自身の本質を知ることさえできません。私は、自分自身を、場所を占め、形、温度、および思考能力を持つ物として認識し、その時、自己の本質そのものではなく、自己の本質の作用の結果を認識します。我々は、第一の種類の達成である物質 (**Matter**) の状態で、我々の世界で最も完全な概念を理解します。この情報は、我々が存在し周囲と相互に作用するという目的には、十二分なものです。

我々は、我々の感覚を働かせて周囲の自然を研究した後で、第二の種類の達成、すなわち物質中の形態 (**Form in Matter**) を理解します。この種の達成の発展の結果、我々が人生のあらゆる場面で深く依存している科学が生み出されました。このレベルの世界の達成も、人類にとっては十二分なものです。

第三の種類の達成である抽象的形態 (**Abstract Form**) は、我々がこの形態をそれが物質の中に納められている時でなく、物質から引き離される時に見ることができたなら実現されていたかもしれません。しかし、形態というものは、想像の中でしか物質から切り離すことができないものなのです (例えば、欺瞞さは、抽象的概念として、ある人から切り離されるのです)。

しかし、概して、物質から切り離される形態のその抽象的形態に関する研究は、信頼できる結果を何らもたらさず、事実に基づくと認められません。これは、物質の中に納められたことのない形態を研究する際に一層当てはまります。

したがって、物の4種類の達成のうち、その本質 (**Essence**) はまったく知覚不可能であり、その抽象的形態 (**Abstract Form**) の達成は不正確であることが分かります。物質 (**Matter**) と、物質と関連させて解析された場合の物質中の形態 (**Form in Matter**) のみが、研究対象の物についての真実かつ十分なデータをもたらします。

形而上の世界である **BYA** (作成、形成、および行為の各世界) では、すべての物 (**object**) がその物質と形態において実現されます。これらの世界の色 (赤、緑、および黒) は物質であり、我々は、これらの色を **Atzilut** (発散の世界) の白い背景の上で実現します。『ゾハールの書』について学ぶ読者は、自己の研究を我々に与えられた2種類の研究に制限する必要性を肝に銘じておかなければなりません。

前に述べたように、すべてのセフィロートはさらに、4つの到達レベルに分けられます。その結果、コクマー (知恵) のセフィラは形態 (**Form**) となり、ビナー (理解)、ティフェレット (美)、およびマルクト (王国) の各セフィラは、形態 (**Form**) の中に納められた物質 (**Matter**) となります。

『ゾハールの書』では、ビナー、ティフェレット、およびマルクトのセフィロートだけが考察の対象になっています。この書は、森羅万象のあらゆる部分に生命を



与える創造主の部分（Ein Sof（無限）の世界）である本質（Essence）のみならず、物質から分離した形態とも何ら関係しません。

Atzilut（発散の世界）のビナー、ティフェレット、およびマルクトのセフィロートは、我々の研究に利用することができますが、ケテルとコクマーのセフィロートは、発散の世界の末端においてでさえ、我々には利用できません。

それぞれの世界に存在するものはすべて、無生物、植物、動物、および人間という 4 つのレベルに分けられます。これらは、願望の 4 つのレベルに対応します。同様に、すべての物が願望の 4 つの下位レベルから成ります。

- 自己の存在を維持する願望は、無生物レベルの発達に対応します。
- 繁栄に対する願望は、植物レベルの発達に対応します。
- 権力、名声、および名誉に対する願望は、動物レベルの発達に対応します。
- 知識に対する願望は、人間レベルの発達に対応します。

このことから、我々が第一の種類（必要不可欠なものに対する願望や動物的な喜びに対する願望）を我々自身よりも低いレベルから得ていることが分かります。我々は、繁栄、権力、および名誉に対する願望を、他人を利用して満たします。教育および知識に対する願望は、より高いレベルの物を利用して満たされます。

形而上のすべての世界は、互いに似ており、レベルに関してのみ異なります。このように、Beria（作成）の世界の無生物レベル、植物レベル、動物レベル、および人間レベルは、Yetzira（形成）の世界の対応する無生物レベル、植物レベル、動物レベル、および人間レベルに写し出されます。これらの世界の順に従って、Yetzira（形成）の世界における上述のレベルが Assiya（行為）の世界の対応するレベルに刻印されます。同じことが我々の世界に達するまで繰り返されます。

- 形而上の世界の無生物レベルは、Heichalot（宮殿）と呼ばれます。
- 植物レベルは Levushim（衣服）と呼ばれます。
- 動物レベルは Mala'achim（天使）と呼ばれます。
- 人間のレベルは、個々の世界において「人間の魂」と呼ばれます。

それぞれの世界の 10 個のセフィロートは、そこにおける創造主の部分と考えられます。各世界の人間の魂は、その世界の中心であり、各レベルから滋養を得ます。

『ゾハールの書』について学ぶ人々は、すべての物についての考察が、専らある世界におけるそれらの相互作用に関して行われることを常に肝に銘じておかなければなりません。すべての研究は、つまるところ、人間の魂と、それと出会うものについての研究ということになります。

『ゾハールの書』がこの世の身体に納められた魂のみを解明するという理由から、

Ein Sof（無限）の世界も専らそれに関して解明されます。つまり、この書は、Ein Sof（無限）の世界の影響、計画、および願望を我々に関してのみ解明し、他の世界のいかなる物に関する研究していません。

創造の始まりから終わりまでのプログラム全体が、我々の世界のみならず Ein Sof（無限）、Beria（作成）、Yetzira（形成）、および Assiya（行為）の世界に組み込まれており、それによりこのプログラムが実現されます。

したがって、すべての世界のすべての行為が、Ein Sof（無限）の世界を根源とするプログラムの実行の結果であり、それらの結果は、Ein Sof（無限）の世界から Atzilut（発散）の世界に降りて、別個のサブプログラムに分裂します。それらは、特定の秩序をもって各世界を通過し、全体および個人に対する統治の形で我々の世界に到達します。

人間の魂は、Beria（作成）世界を起源とします。それ故に、この世界を起点として、人間の魂の Ein Sof（無限）に対する依存と結び付きを研究できるのです。BYA の各世界の 10 個のセフィロートは、それに応じて、その各部分の実現のために割り当てられた計画、方法、および時間を Atzilut（発散）の世界の 10 個のセフィロートから受け取ります。

Atzilut（発散）の世界では、創造の計画がプログラムとして存在するので、Atzilut の世界を通過する Ein Sof の世界の光は、無色のままです。我々が得るすべての情報は、光の無限の変化に基づいており、この変化によって、Beria、Yetzira、および Assiya の世界の色が我々に見えるようになるのです。

## 第 10 章 『ゾハールの書』の序章より

我々は、周囲の自然と我々自身について少なくとも何かを理解するために、創造の目的とその最後の状態について明確に知る必要があります。最後の状態について知らなければならないのは、中間の状態が当てにならないからです。天地創造の目的は創造物に究極の喜びをもたらすことであるとカバリストは主張しています。こうした理由で、創造主は魂、すなわち「喜びを受け取る意思」を生み出されたのです。また、創造主は、創造物に嫌になるほど喜びを与えることを願われたので、ご自分の喜びを授ける意思に十分に適った、大量の楽しむ意思を生み出されました。

したがって、魂とは楽しむ意思ということになります。魂は、この願望に応じて創造主から喜びを受け取ります。受け取る喜びの量は、それを受け取る願望の程度で測ることができます。

存在するものはすべて、創造主または創造主の創造と関わりを持っています。楽しむ意思、すなわち魂が創造される前には、創造主の喜びを授ける意思のみが存在していました。後に、喜びを授ける意思から、創造主の願望に見合った、同量の楽しむ意思が生み出されました。しかし、それは性質の異なるものでした。

したがって、楽しむ意思は、創造された唯一のものであり、また、創造主以外の唯一のものなのです。さらに、この意思は、すべての世界の構成要素であり、それらの世界に住む物はすべてこの意思なのです。また、創造主から流出する喜びは、こうした意思のすべてに活力を与え、それらすべてを支配するのです。

形而下の 2 つのものが距離によって引き離されるように、形而上の世界では、特質と願望の間の不一致が 2 つの形而上の物を切り離し、それらを互いに引き離します。我々の世界では、2 人の人が同じ物を好み、同じ物を嫌う場合、すなわちそれらの人の好み的一致する場合、2 人は互いに近いと言えます。

2 人の好みと考え方が異なる場合、2 人は、好みと考え方の違いが大きくなるのに比例して、遠くなります。人と人との親和性は、物理的な距離によって決まるのではなく、「精神面の」近さによって決まります。互いに愛し合う人々は、互いに支持し、合体します。これに対し、互いに嫌う人々は、北極と南極と同じくらい精神的に離れているのです。

**喜びを受け取る意思：**魂は、創造主の喜びを授ける意思と対立するものなので、創造主から無限に離れています。こうした魂と創造主の隔たりを少なくするために、すべての世界が創造され、2 つの相反するシステム、すなわち光の 4 つの世界（ABYA）と暗闇の 4 つの世界（ABYA）に分割されたのです。

光の世界のシステムと暗闇の世界のシステムの違いは、専ら、喜びを与えることが前者（光の世界）の特徴的な性質であり、喜びを受け取ることが後者（暗闇の世界）の特徴的な性質であるという事実に見出されます。言い換えれば、当初の楽しむ願望が、2 つの部分に分割され、一方がその特質（受け取ること）に関して

不変であり続けるのに対し、もう一方は創造主の特質を獲得した（すなわち、創造主の方に引き寄せられ、創造主と合体した）ということです。

その後、上述の世界は、我々の形而下の世界、すなわち人間が「身体と魂」から成るシステムとして存在する場所に変化しました。身体とは、不変のまま ABYA の暗闇の世界を通して降りて来た、喜びを受け取る意思であり、これは、自分自身のために楽しむ意思、すなわちエゴイズムに相当します。

それ故に、人は、エゴイストとして誕生し、形而上の法則を守り創造主に喜びをもたらすことを始めるまで、このシステムの影響を受けたまま存在し続けるのです。人は、形而上の法則を守り創造主に喜びをもたらすことを実践するうちに、自分自身からエゴイズム（自分自身のために楽しむ意思）を取り除き、創造主のために楽しむ願望を獲得します。その後、魂が光の世界の全部のシステムを通して降りて来て、身体という衣服を着るのです。

この時、是正の時代が始まり、この時代はすべてのエゴイズムが愛他主義（専ら創造主のために楽しむ意思）に変化するまで続きます。

このようにして、人の特質は創造主の特質と同等になります。なぜなら、他人のために受け取ることは、受け取るのではなく、与えることと考えられるからです。特質の同等性は合体すなわち結合を意味するので、人は、自ずと、創造の計画において自分のために準備されたすべてのものを受け取ります。

創造主によって生み出された利己的な楽しむ意思が ABYA のシステムによって 2 つの部分（身体と魂）に分断されることによって、我々の利己的な楽しむ意思は、創造主のために楽しむ意思に変化します。その結果、我々は、創造の計画に従って我々のために準備されたすべてのものを受け取ることができ、それと同時に創造主と合体するに値するものにもなれるのです。

これは、天地創造の究極の目的と考えられています。この段階において、ABYA の暗闇のシステムは、不要になり消滅します。6,000 年（エゴイズムを創造主のために楽しむ意思に変えるのに要する時間）かかると予定された仕事が、すべての人の人生において実践され、また、すべての世代において実践されます。この仕事が完了するまで、すべての人が生まれ変わらなければなりません。ABYA の暗闇のシステムは、専ら身体の是正のために必要であり、人は、身体の是正によって第二の崇高な性質を獲得するのです。

しかし、エゴイズム（利己的な楽しむ意思）は、極めて卑しいものであるのに、創造主はどうしてそれを思い付いたのでしょうか。その答えは簡単です。形而上の世界には時間が存在しないので、創造の最後の状態が、創造の計画と同時に現れたのです。その理由は、形而上の世界では、過去、現在、および未来が 1 つの全体に合体しているからです。

したがって、形而上の世界に、利己的な楽しむ意思と、その結果としての特質の不一致および創造主からの分離が生じたことはありません。創造の始まりから終わりまでの間に、魂は 3 つの状態を通過します。最初に通過する状態は、究極的

な状態です。魂は、特質の類似性により、創造主の傍らに既に存在します。

二番目に通過する状態は、（2つの ABYA システムによって身体と魂に分割された）エゴイズムが 6,000 年の歳月をかけて愛他主義に変えられている我々の現実です。この年月の間に、魂だけが是正されます。身体の影響を受けた魂に固有のエゴイズムが破壊され、魂に本質的に固有の愛他主義が獲得されます。

高潔な人の魂でさえ、すべてのエゴイズムが破壊され、「土」（Assiya（行為）の世界のマルクト）の中に朽ち果てるまで、Gan Eden（エデンの園、すなわち ABYA の世界の光のシステムのある特定のレベル）に到達できません。

三番目に通過する状態は、「死者の復活」すなわち「身体」の是正の後の、魂が是正された状態です。これは、身体に固有のエゴイズムが愛他主義に変化し、身体が、創造主がそれに与えるべく準備していたすべての喜びを受け取るに値する状態に達した状態です。同時に、身体はその特質と創造主の特質が同等になったことにより、創造主と合体します。身体は、創造主と合体することによって創造主を喜ばせません。なぜなら、創造主との一体化こそ「真の」喜びであるからです。

これらの 3 つの状態を綿密に考察すれば、それぞれの状態が他の状態の出現を必要とすることが認められるでしょう。同時に、それらのうちの 1 つを排除すれば、他の状態の消失という結果がもたらされるでしょう。

例えば、最後の、すなわち三番目の状態が現れていなかったら、最初の状態も現れていなかったでしょう。その理由は、最初の状態は、専ら、第三の状態が存在するから生じるというものです。つまり、第三の状態が最初の状態の中に既に存在しているのです。最初の状態の完全性は、将来の状態を現在に映し出すことによって決定されます。将来の状態が存在しなければ、現在の状態も消滅していたでしょう。その理由は、形而上の物には時間が存在せず、それらの状況の変化だけが生じているからです。

天地創造の開始に先立ち、天地創造の思想において、最終的かつ既存のものとして目標が定められ、ここから天地創造が始まりました。それ故に、第一と第二の状態が最新の第三の状態に支えられているのです。一般的な言い方をすれば、この世における我々の行為とは反対に、形而上の物における行為はすべて、起こり得る最後の状態を定めることから始まり、その後、最後の状態に実際に到達するという行為が伴うのです。

したがって、未来が存在するには、現在が存在する必要があります。第二の状態（自己是正への取り組み）から何かがなくなっていれば、如何にしても（第一の状態を必要とする）第三の是正された状態は現れていなかったでしょう。同様に、将来の第三の状態が存在するが故に完全性が既に存在する第一の状態は、第二と第三の両方の状態の存在と完成を必要とするのです。

とは言え、第三の状態が既に、（我々の感覚の中に存在しないにせよ）創造主の計画に従って存在するなら、我々はそれに到達する義務を負うこととなります。そうであるなら、我々の意思の自由は何処にあるのでしょうか。

上述のことから、我々には定められた目標に到達する義務があるにもかかわらず、それを行う方法、すなわち第一の状態から第三の状態へと通過する方法は 2 つあると考えられます。

- 第一の方法は自発的な方法です。この方法の一つとして、カバラによって定められた法則を意識的に守ることが挙げられます。
- 第二の方法は苦難の道です。なぜなら、苦しむことによって身体からエゴイズムが取り除かれ、身体が必然的に愛他主義に到達し、その結果創造主と合体するからです。

これら 2 つの道の相違は、第一の道の方が近道であるということです。結局のところ、第二の道、すなわち苦難の道は、相変わらず我々を第一の道に連れ戻します。天地創造の始まりから終わりまでのどのような場合にも、すべての物が互いに結び付き、互いに我々のすべての状態を必要とします。我々は、墮落した卑しいものなので、創造主と同じくらい完全にならなければなりません。本当のことですが、創造主のような完全な人は、不完全を生み出すことができません。

これまでに述べたことから、完全かつ不滅の我々の身体は、その第一と第三の状態に存在することが理解できます。我々の現在（第二）の状態においては、願望の相違のために創造主から切り離された、卑劣で、墮落した、欠陥のある、まったく利己的な身体が我々に与えられています。我々は、この身体を、専らそれを是正するために受け取り、第三の状態に到達したときに、不滅の身体をその代わりに受け取ります。我々は、現在の状態においてのみ、この仕事を成し遂げることができるのです。

しかし、我々人間は第二の状態においても絶対的に完全な状態に存在すると言う人もいるかもしれません。その理由は、我々の身体（楽しむ意思、エゴイズム）は、日々の経過とともに衰えていくものであり、我々人間が望まれている状態に到達する妨げにはならないからです。1 つだけ必要なものがあります。それは、我々の身体を最終的に排除し、その代わりに永遠かつ完全な身体、すなわち愛他主義的願望を受け取るのに必要な時間です。

しかし、そのように完全な創造主から、そのように不完全な宇宙、すなわち卑しい性癖を持った我々と我々の社会がどのようにして現れたのでしょうか。我々の過渡的な身体、宇宙全体、および現在の形の人間は、創造主の目的に含まれていなかったというのがその答えです。創造主は、我々が既に我々の最後の状態に存在すると考えておられるのです。一時的なもの（エゴイズムを備えた身体など）はすべて、我々自身に治療を施すことによって、我々の精神的上昇を促しているにすぎないのです。

この世界に住む他のすべての創造物は、我々と共に精神的に上昇または下降し、我々と共に完全さを達成します。第三の状態が第一の状態に影響を与えるという理由から、我々は、すなわち自発的な精神的向上、または我々の身体のみに影響を与える苦難の経験という 2 つの方法によって、定められた目標を達成するよう

運命付けられています。

したがって、エゴイズムは、専ら世界からそれを根絶し、それを愛他主義に変えるために創造されたということになります。苦難は、身体というものがいかに無意味であるかを我々に示し、その結果身体のはかなさと無益さが明らかになるのです。

世界のすべての人がエゴイズムを撲滅し、自分自身に配慮するのではなく互いに配慮することを決意したとき、すべての不安が消え去り、皆が確実に平穏で健康的で幸せな人生を送ることができるようになります。なぜなら、皆が自分の幸福が保証されていると確信できるようになるからです。

しかし、我々がエゴイズムに捕らわれる限り、絶えず人間にふりかかる苦難から逃れる道はありません。その一方で、創造主は、カバラによって与えられた道、すなわち他者を愛し他者に配慮する道を選択することを我々に決意させるために、こうした苦難を送り届けられるのです。

したがって、カバラでは、創造主に関する我々の責務よりも対人関係に言及する教えの方が重要であると考えられています。その理由は、社会的責任の方が早くエゴイズムの根絶をもたらすからです。

我々はまだ第三の状態に達してはいませんが、それによって我々が過小評価されることはまったくありません。なぜなら、これは時間の問題にすぎないからです。我々は今、我々の現在の状態において、既に未来を感じることができるのですが、我々の未来を感じる能力は、未来に対する我々の確信によって左右されるのです。その結果、絶対的な確信を持つ人は、第三の状態に対するはっきりとした感覚を発達させることができます。これが起こったとき、我々の身体が存在しないかのように感じられるのです。

しかし、魂は、この特質が創造主と一致するので、永遠に存在します（これは、物質の産物である精神とは対照的です）。魂は、その本質が喜びを受け取る意思から成るにもかかわらず、発達の過程で創造主の特質を獲得します。

願望は要求を生み出し、要求はそれを満たすべき適切な思考と知識を刺激します。人はさまざまな願望を持っているため、要求、思考、および発達が異なるのは当然です。

卑しい要求しか持たない人々の思考や教育の目的は、自己の要求を満たすことにあります。こうした人々は、自己の知識や知性を働かせてはいるものの、これらは低級な（動物的）精神を満たしているにすぎません。エゴに基づく喜びに対する願望が他者に対する権力のような人間の要求に限られている人々は、そうした願望を満たすために自己の能力、知性、および教育を利用します。

その他の人々の楽しむ願望は、専ら知識を利用して喜びを受け取ることにあります。これらの人々は、そうした要求を満たすために自己の精神を働かせなければなりません。これら 3 種類の願望は、純粋な形では決して生じません。なぜなら、それらの願望は、我々すべての内面にあるさまざまな特質の中に混入されている

からです。こうした願望の組み合わせのために、人はそれぞれ異なるのです。

人の魂は、純粋な（光の）ABYAの世界を通り抜けるときに、他者と創造主のために喜びを受け取る能力を獲得します。この魂が身体に納められたとき、愛他主義に対する願望、すなわち創造主への憧れが生まれます。この憧れの強さは、願望の大きさによって異なります。

魂は、衰退の程度や身体の年齢とは無関係に、それが第二の状態において達成したすべてのものを永遠に保持します。逆に言えば、第二の状態の外側では、魂は対応する形而上のレベルを瞬時に受け入れ、その根源に戻るのです。当然のことながら、魂の永遠性は、身体の終焉と同時に消え失せる、人生の間に獲得される知識にまったく左右されません。魂の永遠性は、専ら創造主の特質の獲得の中に見出されるのです。

我々が6,000年にわたってカバラを助けとして是正に努めるよう宣告されていることは周知の事実です。我々は、墮落した楽しむ願望を持つ我々の身体を是正するのではなく、我々の魂だけを是正して、純粋さと精神的向上のレベルに応じてそれを高めなければなりません。しかし、エゴイズムの最終的な是正は、「死者の復活」と呼ばれる状態においてのみ起こり得るのです。

前述したように、第一の状態が完全に現れるためには、第三の状態が存在しなければなりません。したがって、第一の状態は、「死者の身体の復活」、すなわちその状態の欠点のすべてを備えたエゴイズムの復活を必要とします。その後、エゴイズムを墮落した形から同じ度合いの愛他主義に変化させる仕事は新たに始まるのです。これにより、我々が得るものは二倍になります。

- 我々は、身体から、途方もなく大きな楽しむ願望を受け取ります。
- 我々は、自分自身のために楽しむのではなく、創造主の願望を満たすために楽しみます。これは、我々が喜びを受け取っていないかのように思われますが、実際には創造主が我々に喜びを与えることができるようにしているのです。行為に関して我々が創造主と同様になるので、我々は創造主と合体します。創造主は我々に喜びを与え、我々は創造主が我々に喜びを与えることができるようにするのです。その結果、「死者の復活」が第一の状態の後に起こるのです。

我々が今理解しているように、「死者の復活」は、第二の状態の終わり、すなわちエゴイズムが撲滅され、愛他主義が獲得され、魂が最も高い形而上のレベルに到達した後に起こらなければなりません。この状態において、魂は、完全性を獲得し、身体が復活と完全な是正を経験できるようにするのです。

ところで、この原理（「死者の復活」）は、あらゆる場面において効力を発揮します。我々は、悪い習慣、特質、または性癖を正したいと思うときに、それを完全に取り除かなければなりません。我々は、そのような場合に限り、そうした習慣、特質、または性癖の一部を正しい方法でもう一度働かせることができます。しかし、こうした習慣は、それが完全に取り除かれるまでは、正しく賢明な単独



の方法で使用することはできません。このことから、我々は、我々各自が小さな輪を成す、現実という長い鎖における我々の役割を理解することができます。

我々の人生は、4つの時代に分けられます。

**1. 最大限のエゴイズムへの到達** 我々は、これを ABYA の世界の暗闇のシステムから受け取り、その後これを是正します。我々が ABYA の暗闇のシステムにおいて受け取る喜びは、楽しむ意思を満足させず、そうした意思を大きくするにすぎません。

例えば、楽しむことを願う人が喜びを受け取ったとき、願望は 2 倍に膨らみます。倍増した願望が満たされたとき、それは 4 倍になります。我々が、自分自身が不必要な願望を持つことを制限し（カバラ的手法を使用して）、そうした願望を浄化し、次いでそれらを愛他主義に変化させない限り、我々の願望は、一生を通して膨らみ続けるでしょう。死に際になって、ようやく、自分が欲していたものの半分も手に入れることができなかつたことに気付くのです。

言い換えれば、暗闇の力の役割が我々に対処すべき要素を与えることであるにもかかわらず、大抵の場合、我々自身が暗闇の力の要素になっていることが判明します。

**2. 第二の時代**では、我々の心の中の純粋な核心（これは、我々の精神的誕生以来存在しているものです）が、光の ABYA の世界の助けを借りて形而上の法則を守ることにより、上昇するための力と機会を得ます。

この時代の主な課題は、最大限の形而上の喜びに対する願望を獲得し、膨らませることです。我々は、誕生と同時に、形而下の物のみを欲しがります。すなわち、全世界を支配し、また、富や名声や権力を、それらが一過性の不安定なものであるにもかかわらず、独り占めすることを欲するのです。

しかし、我々に形而上の願望が生じたとき、我々は形而上の永遠なる世界も支配したいと思うようになります。これは、真の願望であると同時に究極のエゴイズムでもあります。我々は、自分自身に治療を施すことによって、つまりこの途方もなく大きな、自己満足のために喜びを受け取る意思に対処することによって、自己のエゴイズムの是正に応じた形而上の高さに到達することができるのです。

エゴイズムは、おびただしい数の困難をもたらし、我々を形而上の世界から遠ざけます。我々は、自分自身と絶えず激しく闘わない限り、世界のすべての物に対する欲求を生み出します。我々は、この闘いで成功を収めることができれば、我々の創造主との合体を助ける、創造主との非常に強い親和力を感じるようになります。

この闘いは、この世界でよく知られている、人が自己の願望を働かせる際に自己を規制し戒めるための手段としての願望に対するものではありません。むしろ、宇宙と時間を越えた精神性、永遠性、および支配の偉大さについて深く考察した後、精神性と永遠性を達成したいという熱い思いが養われるのです。創造主との合体に対するこうした願望は、第二の時代の最終的なレベルに相当します。

**発達第三の時代**に行われることとして、カバラについての研究と、上層世界の法則を守ることが挙げられます。この時代において、我々は、創造主に喜びをもたらす意図を持つ反エゴイズムの牽制部隊の助けを得て、決して自分自身の利益のために喜びを受け取らなくなります。この仕事によって、エゴイズムが是正され、創造主と同じように善行を行う願望に変化するのです。

我々は、エゴイズムの無力になった部分に応じて、特定のレベルの魂、特定の量の光、および、Nefesh、Ruach、Neshama、Haya、および Yechida (NRNHY) の 5 つの部分から成る喜びを受け取ります。我々が利己的な楽しむ意思、すなわちエゴイズムを持ち続ける限り、我々は、創造主から切り離されたままであり、魂は微塵たりとも我々の身体に入ってくるのではありません。

しかし、我欲を完全に滅ぼし、専ら創造主のために楽しむ意思を（創造主と似たものになることによって）獲得した後は、我々の魂全体（合体した魂の一部）がすぐさま我々を支配するようになるのです。

**第四の時代**は、エゴイズムが完全に力を失った直後に死者の完全な復活が起こる「死者の復活」に続く時代です。エゴイズムを愛他主義に変える仕事が再び始まりますが、我々の世界でこの仕事を成し遂げることができる人はごく少数です。

カバラは、すべての世界が（「全人類」という意味での）人間のために創造されたと述べています。しかし、創造主が、他の世界だけでなく我々の世界においてさえ迷子になっている人間のような取るに足らない物のために、労を惜しまずこれらすべての世界を創造されたのは不思議ではないでしょうか。人類は、何故、この創造物のすべてを必要とするのでしょうか。

創造主の楽しみは、創造物を喜ばせることにあるので、創造物の創造主に対する知覚と認識の度合いに左右されます。創造主の楽しみは、また、我々が創造主をすべての善をもたらすものとして認識する度合いによっても左右されます。我々が創造主をすべての善をもたらすものとして認識した場合に限り、創造主は我々から喜びを受け取ります。これは、自分の最愛の子供と遊ぶ親が、自分に対する子供の素振りを見て楽しむのに似ています。親は、子供が自分を、専ら子供が要求するのを待ち構えていて、子供が要求するものをすぐに与えてくれる愛情あふれる強い親として認めることに満足しているのです。

ここで、創造主が極めて高く上昇した人々から得る喜びが如何に大きいかを想像してみましょう。このような人々は、創造主が自分のために準備していたすべてのものを認識し、経験します。彼らは、親と忠実で可愛い子供との関係に似た関係を創造主との間に築きます。このことから、創造主によるすべての世界の創造が価値あるものであったことをお分かりいただけるでしょう。選ばれた人々は、創造主に近づく人々が明らかにすることよりもはるかに多くのことを理解するでしょう。

創造主は、創造物に世界の啓示に対する準備をさせるために、無生物、植物、動物、および人間という 4 つの発達段階を我々に与えられました。これらの発達段

階は、喜びを受け取る意思の 4 つのレベルに対応しています。主たるレベルは 4 番目のレベルですが、このレベルには、我々が各レベルに完全に熟達した後の段階的発達によってのみ到達できます。

**第一のレベル（無生物）**は、顕現の始まり、すなわち我々の形而下の世界における願望の受胎に相当します。その力は、あらゆる種類の無生物的性質を含みますが、この性質を形成するいかなる要素（例えば、岩）も、自力で動くことはできません。

楽しむ意思は要求を生み出し、これらの要求は、願望の対象を獲得するために運動を引き起こします。この場合（第一のレベルでは）、楽しむ意思は、極めて小さく、したがって、すべての要素全体に影響を及ぼすにすぎず、自然の無生物的要素のそれぞれにおいては発現しません。

**第二のレベル（植物）**では、楽しむ意思がより大きくなり、早くも個々の要素の中に発現します。したがって、植物レベルの各要素は、既に個別の動く能力（例えば、植物は花びらを開かせ、太陽の方向に向きを変えます）を持っているのです。このレベルには、吸収や排泄のようなプロセスが含まれますが、このレベルの生物には、個別の意思の自由の感覚がまだ備わっていません。

**第三のレベル（動物）**では、喜びを受け取る意思がさらに大きくなります。個々の要素の中で、願望が個別の感覚を生み出し、すべての動物の一生が固有のものになります。つまり、どの動物の一生もその他の動物の一生とは異なるということです。しかし、このレベルでは、他の動物への感情移入の感覚は存在しません。これらの動物は、他の動物に対して必要な思いやりや喜びをまだ持っていません。

**最後、すなわち第四のレベル（人間）**では、楽しむ意思が他者に対する感覚を生み出します。例えば、第三と第四のレベルの違いは、動物全体と 1 人の人間の違いに似ています。なぜなら、動物は他の生物を感じることができず、専らそれ自身の願望の範囲内で要求を生み出すからです。

他者を感じることができる人は、同時に、他者の要求を獲得し、その結果、他者を羨むようになり、より多くのものを欲しがり、ついには世界全体を自分のものにすることを欲します。

創造主の目標は、創造物を喜ばせて、創造物が創造主の偉大さを示し、創造主が創造物のために準備していたすべての喜びを受け取ることができるようにすることです。人間だけが他者への必要な感覚を備えており、人間だけが、自己に対する治療の過程でカバラの教えに従うことにより、楽しむ意思を、他者を喜ばせる意思に変えることができます。

そのような能力が存在するが故に、形而上の世界と創造主の感覚が人にもたらされるのです。人は、個々の形而上の世界における NRNHY（光）のあるレベルに到達することにより、創造の目的と合致した喜びを受け取ります。

我々は、小さく、取るに足りないものに見えるかもしれませんが、しかし、今尚、創造の中心および目標を構成しているのは人間です。我々は、ハツカダイコンの

中に寄生している寄生虫に似ています。寄生虫は、世界全体の過酷さと大きさが、自分が生まれたハツカダイコンの過酷さと大きさと同程度であると信じているのです。しかし、寄生虫は、ハツカダイコンの外皮を破って外の世界を眼にしたら、驚きのあまり、「世界はハツカダイコンとたいして変わらないと思っていたのに、本当はなんと大きく美しいものなのだろう。」と叫ぶでしょう。

同様に、エゴイズムという殻の中に生まれ、専ら自分自身を喜ばせることを欲する我々は、是正の手段であるカバラなくしては、この殻を破ることができません。我々は、楽しむ意思を、他者と創造主を喜ばせる意思に変えることができません。それ故に、我々は、世界全体が単に自分が見て感じるものにすぎないと思ひ込み、創造主が我々のために如何に多くの善を準備されていたかに気付かないのです。

創造物はすべて、アダム・カドモン、*Atzilut* (発散)、*Beria* (作成)、*Yetzira* (形成)、および *Assiya* (行為) の5つの世界に分けられます。それにもかかわらず、それらの1つ1つのすべてが、無限の数の要素から成ります。5つの世界は、5つのセフィロートに対応します。アダム・カドモンはケテル (王冠) のセフィラに対応し、*Atzilut* (発散) の世界はコクマー (知恵) のセフィラに、*Beria* (作成) の世界はビナー (理解) のセフィラに、*Yetzira* (形成) の世界はティファレット (美) のセフィラに、*Assiya* (行為) の世界はマルクト (王国) のセフィラにそれぞれ対応します。

これらの世界を満たす光 (喜び) は、それに応じて、*Yechida*、*Haya*、*Neshama*、*Ruach*、および *Nefesh* (*NRNHY* という用語は、これらの頭文字を逆順に並べたものです) の5つのタイプに分類されます。

それにより、アダム・カドモンの世界は *Yechida* と呼ばれる喜び (光) で満たされ、*Atzilut* (発散) の世界は *Haya* と呼ばれる喜びで満たされます。*Beria* (作成) の世界は *Neshama* と呼ばれる喜びで満たされ、*Yetzira* (形成) の世界は *Ruach* と呼ばれる喜びで満たされ、*Assiya* (行為) の世界は *Nefesh* と呼ばれる喜びで満たされます (表1参照)。

これらの世界の起源は創造主です。言い換えれば、喜びを受け取る願望と、そうした願望を満たす喜びのどちらの起源も創造主であることに変わりないのです。しかし、各世界は、ケテル (王冠)、コクマー (知恵)、ビナー (理解)、ティファレット (美)、およびマルクト (王国) の5つのセフィロートに次々と分割され、それらのセフィロートは、対応する *NRNHY* の光で満たされます (表1参照)。

世界	各世界における第一位の光	各世界におけるセフィロート (太字で示したものが第一位のセフィラ) および それらを満たす光
アダム・カドモン	<b>Yechida</b>	<b>ケテル (Yechida)</b> コクマー (Haya)

		ビナー (Neshama) ティファレット (Ruach) マルクト (Nefesh)
Atzilut (発散)	Haya	ケテル (Yechida) <b>コクマー (Haya)</b> ビナー (Neshama) ティファレット (Ruach) マルクト (Nefesh)
Beria (作成)	Neshama	ケテル (Yechida) コクマー (Haya) <b>ビナー (Neshama)</b> ティファレット (Ruach) マルクト (Nefesh)
Yetzira (形成)	Ruach	ケテル (Yechida) コクマー (Haya) ビナー (Neshama) <b>ティファレット (Ruach)</b> マルクト (Nefesh)
Assiya (行為)	Nefesh	ケテル (Yechida) コクマー (Haya) ビナー (Neshama) ティファレット (Ruach) <b>マルクト (Nefesh)</b>

表 1

さらに、各世界には、無生物、植物、動物、および人間という 4 つのレベルがあります。宮殿 (Heichalot) は無生物レベルに対応します。衣服 (Levushim) は植物レベルに対応します。天使 (Mala'achim) は動物レベルに対応し、人間の魂 (Neshama) は人間レベルに対応します。

これらのレベルは、同心円 (または玉ねぎの層) 状に、1 つずつ別のレベルの内側に配置されています。

- 最も内側にあるケテル (王冠) のセフィラは、創造主として、個々の世界に影響を及ぼします。
- Neshamot (個々の世界に存在する人間の魂) は、ケテルのセフィラを包みます。
- 次いで、Mala'achim (天使) が Neshamot を、Levushim (衣服) が Mala'achim を、Heichalot (宮殿) が Levushim を包みます。

無生物、植物、および動物レベルは、第四のレベル、すなわち人間の魂の願望のために創造されました。それ故に、それらは人間の魂を外側から包んでいる（人間の魂に仕えている）と喩えられるのです。我々は、合体した（分裂する前の）魂の一部を生まれながらにして持っています。この部分は、我々の心、我々の願望の中に存在する核心、すなわちエゴイズムに相当します。すべての創造物は、すべてのレベルとすべての世界における支配的な一般法則がそれらのすべての部分（たとえそれが微粒子であったとしても）に現れるように作られています。

例えば、存在する物はすべて、5つの世界、すなわち、ケテル（王冠）、コクマー（知恵）、ビナー（理解）、ティファレト（美）、およびマルクト（王国）の5つのセフィロートに分けられます。個々の世界はそれぞれ、5つのセフィロートから成り、これらのセフィロートの内部でも、最も無意味な物でさえ5つのセフィロートに分けられます。

既に述べたように、我々の世界には無生物、植物、動物、および人間という4つのレベルが存在します。これらは、マルクト（王国）、ティファレト（美）、ビナー（理解）、コクマー（知恵）、およびそれらの根に相当するケテル（王冠）に分けられます。

さらに、無生物、植物、動物、および人間の各レベルのすべての部分が、願望の大きさに応じて4つの下位レベル（無生物、植物、動物、および人間）に分けられます。その結果、人間の願望も4つのレベル（無生物、植物、動物、および人間）から成り、魂の核心が各レベルの中心に位置します。

しかし、人が形而上の法則を守り始めたら、存在するすべての物の支配者としての創造主に対する特別な気持ちがそれに伴わなくとも（創造主を感じる事ができないが故に十分な尊敬や畏れの念を抱かなくとも）、あるいは、人が自分自身のために喜びを受け取ることを欲しはするものの、愛他主義への性癖を獲得したいと強く望むならば、これで十分に心の中の核心が向上し始め、それが感じられるようになります。

これこそが、カバラと、形而上の法則を守るためのカバラの手法を驚くべきものにしてしているのです。それ故に、たとえ精神的発達の目的が利己的なものであったとしても、カバラの原理を研究し、守ることによって学習者の心が浄化され、学習者は、たとえ到達するレベルが第一の無生物レベルまでであったとしても、徐々に上昇するのです。

我々が精神的な世界を物質的な世界よりも上位のものとし愛他主義を望む限り、我々は自己の願望を変化させ、その結果、この第一のレベルの構造全体が築かれます。その後、魂が上昇して Assiya（行為）の世界のマルクト（王国）のセフィラの中に正式に納められ、人の身体全体がそのレベルの対応する光（喜び）を感じます。この光は、より高いレベルに向かってさらに前進する助けとなります。

魂の Nefesh のレベルの光の核心が精神的誕生の時点で我々の心の中に存在するのと同様に、Assiya（行為）の世界の新たに生まれた Nefesh のレベル全体の中にも、

Assiya（行為）の世界のより高い Ruach のレベルの核心が存在します。

同じことがすべてのレベルに起こります。人は、1つのレベルに完全に熟達した後に、次のより高いレベルの核心に移ります。これは、低いレベルとより高いレベルを最高のレベルに至るまで連結する唯一のものです。人は、この核心を通過してこそ、創造主に向かって前進できるのです。

Assiya（行為）の世界の Nefesh の光は、身体の中の願望の是正された無生物的部分に相当するので、「Assiya の世界の無生物レベルの光」と呼ばれます。形而上の世界におけるそのような人の行為は、形而下の世界における無生物的性質を持つ行為と似ています。どちらの場合も、個別の動きはなく、1つ1つは、無生物的な物体と願望すべての総体的なまとまりの全包括的な全体運動の一部にすぎないのです。

Assiya（行為）の世界の Nefesh と呼ばれる物は、613の形而上の法則と対応する、人間の身体の613の器官に似た個別の要素を含みます。それらの各々が、創造主の光に対する固有の知覚（喜び）を備えています。とは言え、部分間の相違はいかなる時にも目立たず、カバリストは、光の、すべての部分に均等に広がる全体的な影響のみを知覚します。最高位（アダム・カドモンのケテル）から最低位（Assiya の世界のマルクト）に及ぶ世界において、セフィロートの間には何らの相違も存在しないものの、光を受け取る人に関しては、そのような相違が存在します。

セフィロートは、器とそれを満たす光に分けられます。光は、創造主自身から発せられます。器は、ケテル（王冠）、コクマー（知恵）、ビナー（理解）、ティファレット（美）、およびマルクト（王国）のセフィロートとも呼ばれます。最後の3つの世界である Beria（作成）、Yetzira（形成）、および Assiya（行為）の世界では、これらの器は、受け取る人に応じて光の分量を遮断し、正確に調整するフィルタを構成します。

このように、すべての人は、各自の魂の精神的発達レベルに正確に対応した分量の光を受け取ります。フィルタの内側の光は受け取る人から見ると均一であるものの、この光はフィルタ（器）の特質に応じて分割されるので、NRNHY と呼ばれます。

マルクトは、最も密度の高いフィルタです。それから受け取られる光はわずかで、身体の無生物的部分を是正するためのものにすぎません。それ故に、「Nefesh の光」と呼ばれるのです。

ティファレットは、マルクトよりも透過性の高いフィルタです。したがって、それを通過する創造主から我々への光の分量は、身体の植物的部分を浄化するためのものです。その光は Nefesh の光よりも強く、Ruach と呼ばれます。

ビナーは、ティファレットよりも透過性の高いフィルタです。このフィルタは、身体の動物的部分を是正するための光を通し、Neshama と呼ばれます。

コクマーは、最も透過性の高いフィルタです。これは、人間レベルの願望を上昇

させるための光を通します。この光は、「Haya の光」と呼ばれ、その力は無限です。

既に指摘したように、我々が既に（カバラの助けを借りて）Nefesh のレベルに到達しているならば、次のレベル、すなわち Ruach の核心が我々の内面に既に存在します。我々が形而上の法則を守るためにカバラの手法を利用し続けるならば、我々は、上昇して Assiya の世界のティファレトのセフィラに包まれる植物レベルの楽しむ意思を獲得するでしょう。

我々の世界における植物が、無生物とは対照的に個別の動きをする能力を持つのと同様に、形而上の発達初期段階にある人は、形而上の動きと力の目覚めを経験します。さらに、人が Ruach のレベルに到達したときには、次の Neshama のレベルの核心がその人の内面に既に存在します。

人は、カバラの秘密を解明することによって、自己の願望の中の動物的レベルを浄化します。人は、器全体を築き上げたときに、上昇し、Assiya の世界のビナーのセフィラに包まれ、それから Neshama の光を受け取ります。このような人は、身体の動物的部分が浄化されているが故に、「純粋な動物」（浄化された動物）と呼ばれます。

そのような人は、動物のように、613 のそれぞれの願望の個々の感覚を獲得します。なぜなら、そのような人は、我々の世界の動物と同じように、すべての動きを別個に生じるからです。そのような人が受け取る光は、我々の世界の動物と植物の差と同じだけ異なります。

人は、613 の願望（器の部分）を完全に抑制し、器の 613 の部分のそれぞれに対する特別な喜びの光を受け取ると、自己に対する治療をさらに続けます。Neshama の器が完成した後に現れた核心を起源とする同じ光を使用して、人間的部分から願望が取り除かれます。

人間レベルの対応する願望の創造が完了すると、我々は、他者を感じる能力と、他者の考えを理解する能力を獲得します。受け取られた光（喜び）は、我々の世界における人が動物と異なるように、従前のレベルの光と異なります。

ただし、これら 5 つのレベルは、すなわち Nefesh の NRNHY の喜びにすぎません。この世界には、Ruach でさえ存在しません。なぜなら、Ruach は Yetzira（形成）の世界の光であり、Neshama は Beria（作成）の世界の光であり、Haya は Atzilut（発散）の世界の光であり、Yechida はアダム・カドモンの世界の光であるからです。しかし、全体に存在する光は、全体の各部分、すなわち個々の部分にも存在します。言い換えれば、これら 5 つのタイプの光は、Assiya（行為）の世界の Nefesh の最も小さな無生物レベルにおいてでさえ存在するのです。

Yetzira（形成）の世界では、これら 5 つのタイプの光は、Ruach のレベル全体に存在します。これらのタイプの光は、Beria（作成）の世界では Neshama のレベルの NRNHY に相当し、Atzilut（発散）の世界では Haya のレベルの NRNHY に相当し、アダム・カドモンの世界では Yechida のレベルの NRNHY に相当します。世界間の



相違は、Assiya（行為）の世界のNRNHYのレベルの間の相違に似ています。

したがって、すべてが、上層の世界に到達することを願い、その結果、自己の精神的特質をそれぞれの世界の特質と同等にする人間の精神的レベルに左右されるのです。その結果、人間はそれぞれの世界の切り離せない部分となるのです。これが、すべての世界が創造された理由であり、また、我々がすべての世界を必要とする理由であるのです。

本当に、我々は、各世界のNRNHYのレベルの1つ1つを着実に上っていなかったら、創造主に到達することはできなかつたでしょう。我々は、あるレベルに到達することによって、光（喜び）を感じ、これを助けとして、天地創造の目的、すなわち創造主との同化と結合を達成するまで、利己的な楽しむ意思の撲滅に努めることができるのです。

NRNHYが天地創造の5つの部分への分割を構成することを理解することが重要です。システム全体で機能するNRNHYは、システムの最も小さい部分においても機能します。それ故に、Assiya（行為）の世界の最も低いレベルでさえ、その世界の5つの構成要素、すなわちその世界の個々のNRNHYから成るのです。これは、無限に小さいすべての願望が、ケテル（創造主の象徴）、コクマー、ビナー、ティファレト、およびマルクト（天地創造の4つのレベル）から成るからです。さらに、NRNHYを導く喜びも、5つのタイプのNRNHYの光から成るのです。

したがって、これら4つの種類の到達なくしては、Assiya（行為）の世界の形而上的に無生物レベルの光にさえ到達することはできません。カバラを研究し、他人と創造主を思いやることによって形而上の法則を守ることから免れることができる人は誰一人としていません。また、カバラの秘密を解明することなく、RuachのレベルやNeshamaのレベルに到達できる人は誰一人としていません。

我々の世代は、いまだに暗闇から抜け出ることができません。しかし、この理由が一般的な信仰の衰退、特に賢人の知恵への信仰の衰退であることは明らかです。こうした衰退の最も分かりやすい例として、形而下的な記述で満ち溢れた今日のカバラに関する書物を挙げることができます。

それ故に、『ゾハール』についての完全な注釈書、すなわち我々をカバラの誤った解釈から救う書物が求められるようになったのです。この注釈書は、学習者がその段階を1つずつ上り、形而上の高さに到達する助けとなるので、『The Sulam（梯子）』と呼ばれています。すべてが、人の、世界の創造の深淵に到達する願望と、そこでの居場所に左右されるのです。

次のたとえ話で、カバラの目的を説明することができます。

遠くの王国の臣民が法律を破り、その臣民は国王の命令でその国から追放されました。その臣民は、友人、家族、そして自分にとって愛しいものすべてと別離しました。新しい場所に移り住んだその人は、最初は非常に悲しい思いをしていましたが、人生におけるすべての物事と同様に、少しずつ新しい家に慣れて、自分が生まれた場所や、自分がかつて住んでいた場所を完全に忘れてしまいました。

その人は、自分が追放されたことも、自分がかつて他の場所に住んでいたことも思い出せませんでした。その人は、家を建て、新しい友人を作り、生活を立て直しました。ある日、その人は、自分の生まれ故郷である王国についての書物を見つけました。その人は、その王国がどこにあるのか、また、自分がそこでどんなに素晴らしい生活をしていたか思い出しました。その人は、その書物を読んで、自分がなぜ追放されたのか、また、どうしたらその王国に戻ることができるのかを知りました。

上述の王国は形而上の世界であり、そこは、大王のおきてを守る人々にとってはすべての物がすばらしい世界です。臣民が追放された国が我々の世界です。すべての人に、忘れたことを思い出させ、魂の故郷を発見させ、自分が追放された理由を理解させ、最後に彼らを元の場所に戻らせる手段となる書物が『ゾハールの書』なのです。

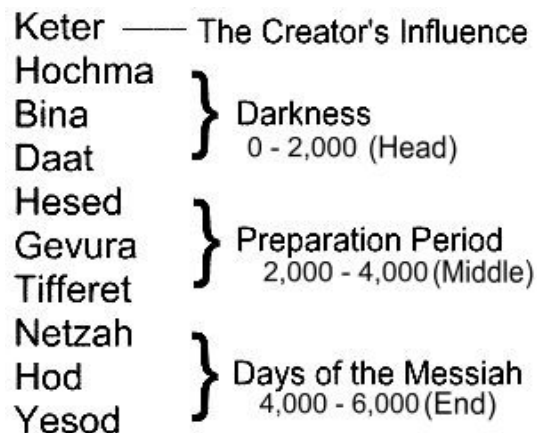
しかし、『ゾハールの書』が非常に重要で、我々が上層世界に到達して魂の世界と創造主自身を見て感じる助けとなるのなら、なぜ、長年の間（それが記されてから Ari のカバラ的手法が現れるまで）それが秘密にされていたのでしょうか。

この疑問に対する答えは、カバラの中に見出されます。世界は、それが存在する 6,000 年間にわたり、10 個のセフィロートから成る構造を保ち続けてきました。この構造では、ケテルが創造主の影響力を表し、その他のセフィロートは 3 つのグループに分けられます（下記の各項目および図 3 参照）。

- 頭部：コクマー（知恵）、ビナー（理解）、ダアト（知識）
- 中間部：ケセド（慈悲）、ゲブラー（峻厳）、ティファレト（美）
- 端部：ネツァク（勝利）、ホド（栄光）、イエソド（基礎）

6,000 年の期間も 3 つの部分に分けられます・

- 2,000 年－暗闇
- 2,000 年－準備期間
- 2,000 年－救世主の時代



### 図 3

最初の 2,000 年間は頭部に相当し、したがって、この時代が受け取る光はわずかな光 (Nefesh) です。なぜなら、セフィロートは、それらを満たす創造主の光と反比例するからです。第一のグループ (高位のセフィロート) を満たす光はわずかでありながら、コクマー、ビナー、ダアトから成るこのグループが最初に現れます。この最初の 2,000 年間は「暗闇の時代」と呼ばれます。

第二のセフィロートのグループ (ケセド、ゲブラー、およびティファレト) が現れる次の 2,000 年の間に、第一のセフィロートのグループを満たした Nefesh の光が第二のグループに降りて、Ruach の光が第一のグループを満たします。暗闇の時代に続くこの 2,000 年間は、「トーラーの時代」と呼ばれます。

ネツァク、ホド、イエソドのセフィロートから成る第三のグループは、2,000 年を要します。Nefesh の光がここから第二のグループに降りて、Ruach の光が第一のグループから第二のグループに降り、Neshama の光が第一のグループに入ります。

カバラの知識全体、特に『ゾハールの書』は、第三のグループが現れるまで秘密にされていました。Ari は、『ゾハールの書』を我々に公開し、彼の注釈書は我々に形而上の世界に到達する道を示しています。Ari は、その時代が終わる前、すなわちすべての光が第三のグループに入る前に亡くなりました。したがって、当時、カバラの本質を世界に明かすことなくカバラを研究することができたのは特別な魂に限られていたのです。第三の時代の終わりに近づきつつある今日、我々は、『ゾハールの書』についての包括的な Sulam (梯子) の注釈と、『Talmud Eser Sefirot (10 個のセフィロートの研究)』と題された、カバラに関する体系的な教本をいつでも手に入れることができます。

最初の 2,000 年間と次の 2,000 年間に生きた魂は、きわめて高位のもので、上位のセフィロート (コクマー、ビナー、およびダアト、ネツァク、ゲブラー、およびホド) に対応していたにもかかわらず、受け取るべき光を受け取ることができませんでした。なぜなら、そうした光がまだ我々の世界に到達していなかったからです。今日、我々の世界の事象が証するように、最も低位の魂が我々の世界に降りて来つつありますが、これらの魂は構造を完成させるものなのです。上層の光が、既に我々の世界から上層世界に上昇した上位の魂に入り、その魂の光が包む光として我々に到達するのです。

我々の世界では純粋な魂が最初に現れることになっていたもので、第一の世代の魂の特質は我々の魂の特質よりも優れていたのです。それにもかかわらず、カバラの科学、すなわちカバラの内なる秘密の部分 (その他の科学と同様の部分) は、最後の世代においてのみ公開されているのです。その理由は、そうした部分が光の強さに依存しているからです。

魂が低位のものであるほど、それに対して現れる光は多くなり、我々の世界に入ります。なぜなら、低位の光は上位のセフィロート (または魂) から低位のセフィロート (または魂) に降りることができ、上層の光が上位のセフィロート (ま

たは魂)の空虚な空間に入るからです。

是正の成就はセフィロート(魂)を意味し、精神的遵守(意図)は魂に入る光を意味します。同様の逆の依存関係が、セフィロート(魂)と光の間に存在します。天地創造は、低位の光で満たされた上位のセフィロートから始まり、上層の光で満たされた低位のセフィロート(魂)で終わります。したがって、上層の光を明らかにするのは低位の魂ということになりますが、これが当てはまるのは、そうした低位の魂がカバラの正しい研究に携わる場合に限られます。

『ゾハールの書』およびカバラそのものについての研究は、世界全体の是正と、絶対的な平和と幸福の達成への出発点です。

## 第 11 章 『10 個のセフィロートの研究の手引き』 より

Baal HaSulam (ラビ Yehuda Ashlag) は、『*Introduction to the Study of the Ten Sefirot* (10 個のセフィロートの研究の手引き)』の中で、彼の第一の願望は我々とカバラを引き離してきた鉄の壁を打ち破り、今後カバラの科学が我々の世界から姿を消さないようにすることであると説明しています。しかし、カバラの研究に対して多くの異論が唱えられてきたことは事実です。とは言え、そうした異論はすべて、カバラの本質と目的を無視することから生じたものなのです。

Baal HaSulam は、さらに、我々が「自分の人生、すなわち、自分に与えられた限りある辛く厳しい困難だらけの年月の意味が何であるのか」、「誰がそのような人生を楽しめるのか」、「創造主は我々に何を要求されているのか」と自問しても、これらの問いに対する答えはどこにも見出せないと言っています。

Baal HaSulam は最後に、カバラが「神が善であることを味わい認識せよ」(カバラの研究を通して獲得される創造主の感覚のこと)と主張していると述べています。カバラを学習した人は、創造主は絶対的に思いやりがあり、それ故にそうした感覚のすべてを我々のために創造され、それに到達できるように我々にカバラを授けられたことを理解するでしょう。カバラを学習した人は、この世に存在する間にそうした感覚のすべてを感じることができます。カバラは、我々に、「人生を選べ」と勧めています。「人生を選ぶ」とは、善を選び、辛く無意味な存在である死を選ばないことです。「選べ」ということは、我々に選択肢が与えられていることを意味すると言われています。

そうした選択肢は予め定められた目標への 2 つの道の選択のみに伴うことが、これまでの論文において明らかにされています。つまり、精神的向上(カバラの道)と苦難の道が用意されているのです。究極の目標は、エゴイズムを撲滅し、愛と授与の特質を獲得することです。

どのようにしたらこれを達成できるのでしょうか。「土の上で眠り、パンと水があるだけで満足してごらんください。そうすれば、この世と来世で幸せになれるでしょう。」と記されています。人は、このようにして形而上の特質を獲得し、上層世界と合体し、その後のみ、創造主の善を感じるのです。

しかし、この方法で目標を達成できるのは、特別な個人(魂)に限られています。そうした理由から、別の道、すなわちカバラの研究が我々に与えられてきたのです。カバラの光は魂に影響を与え、魂を正しい方向に変化させます。我々は、カバラの研究をするときに、物理的な苦難ではなく、心と精神を通しての達成の道を歩むのです。

しかし、カバラの光は、創造主に対して忠実で誠実な人々、すなわち創造主の善の行為を信じる人々にのみ影響を及ぼします。カバラの道を歩めという第一の要求は、創造主への信仰であり、これは人が創造主に捧げる時間と労力によって測られます。

したがって、課せられた仕事は、つまるところ、創造主に向かって前進する人々への創造主の力と保護と愛に対する最大の確信を得ることになります。この信仰は、カバラの研究による以外のいかなる源からも獲得することはできません。カバラの主たる長所は、それが創造主を直接研究するという事実にあります。それ故に、カバラがもたらす上層の光は強く、短時間で我々を是正するのです。

カバラの知識は、2つの部分、すなわち記述されたことのない秘密の部分と語り伝えられている部分から成ります。人は、明らかにされた部分を研究しなければなりません。なぜなら、目標の達成は、専らその部分にかかっているからです。

上層の光の影響は、カバラの学習者の目標が個人的なエゴイズムを撲滅し、創造主と合体することである場合にのみ、肯定的なものになります。人は、すぐに望ましい目標に慣れることができません。この目標は、学習中絶えず追求されなければなりません。これは、形而上の世界と創造主の行為を研究することにより、特に本当になります。このようにして、学習者は、思考と、研究しているものと合体する願望に集中する方が近道であることに気付くのです。

我々と形而上の世界が離れていることは、あらゆる苦痛、困難、苦悩、およびむなしさの原因になります。世界がどのように支配されているかについて我々自身が誤った解釈をしていることと、我々が創造主を感じる能力を持たないことが原因で、我々は創造主の支配について理解することができません。本当に、世界の支配が解明されていれば、また、我々の行為の直後に報酬が与えられ、または罰が下されるなら、すべての人が高潔であるでしょう。

したがって、我々に欠けている唯一のものは、支配に対する具体的な認識であることになります。この具体的到達は、4つの段階で解明されます。

- 創造主の行為の二重の隠蔽
- 一重の隠蔽
- 原因と結果、報いと罰への到達
- 善であるか悪であるかを問わないすべての物がすべての創造物の善のために創造されることが明らかになった直後の絶対的到達

人間の初期の状態では、創造主は、実際に人間から二重に隠蔽されます。この状態では、人は、世界における創造主の存在の結果を何ら理解せず、自然を信仰します。一重の隠蔽は、創造主との接近が不十分であるが故に災いが人に降りかかる状態です。この状態の人間は、災いが個人的な行為の結果であるだけでなく、創造主の支配の結果でもあると確信します。この隠蔽は、人が上層の支配の存在を信じる場合のものであります。

これら2つの隠蔽は、創造主への接近という主たる仕事を構成します。なぜなら、創造主の隠蔽によって、意思の自由の可能性が生じるからです。人が信仰において創造主に向かって前進するにつれて、あらゆる行為において創造主に会うことを願う間に、創造主は徐々にその姿を現されるのです。そのような状態において、

人は、世界の支配の原因と結果を理解し、世界の支配の必要性とその莫大な利益を認識した直後にエゴイズムを撲滅するのです。当然、この時点では、後戻りすることはできません。なぜなら、人は、この時点において、罰を感じ予測するからです。

人は、浄化を続ける間に、創造主への絶対的な愛のレベルに到達し、絶対的な創造主への到達を獲得します。これこそ、すべての個人の究極の目標です。すべての世界と、それを支配しそこに存在する力は、この目的のために創造されたのです。

「あなたがまだ生きている間にあなたの世界に到達してそれをご覧なさい。」と記されています。これは、暗闇の中や創造主が隠蔽されている状態で、また、我々が自然と社会に対抗して自己の意志力を働かせ、創造主を追求する際の我々の世界と形而上の世界との間の障壁を克服するときに、長く困難な道を歩むことに対する報酬です。乗り越えなければ障害が多いほど、また、乗り越えなければならぬ距離が大きいほど、獲得される相互愛の感覚は強くなります。

この目標は、カバラを研究する際に絶えず追求されなければなりません。なぜなら、そうであるときにのみ、我々に成功がもたらされるからです。そうでなければ、この研究は我々に背を向けるようになり、我々のエゴイズムを増長させるにすぎません。それ故に、我々のうちでも創造主から極めて遠い人々が、創造主の行為、思考、および目標を記したカバラを研究することが非常に重要なのです。カバラは、我々が創造主をより深く知る助けとなり、我々はこうした知識を通して創造主を愛し、創造主に憧れるようになるのです。我々は、最も遠い地点から出発するとは言え、すべての人が創造主を愛し、創造主に完全に到達するレベルに到達する義務を負っているのです。

カバラは、我々に受け継がれる前に、Atzilut（発散）の世界におけるその創造のレベルから、多数の連続する制約を受けてきました。しかし、その本質は固定されたものであり、不変です。創造物のレベルが低いほど、それらに対するカバラの重要性は高くなります。カバラは、創造物が、その内面にある願望によって拘束されたその身体にかけられた手かせ、足かせを解く助けとなります。

我々の世界では、カバラは、Atzilut（発散）の世界から制御される覆い（自然、動物、および時間）の下で秘密にされてきました。これらの外皮は、支配のシステムを見えなくするので、我々の苦悩の源となります。

これらの外皮と、Beria（作成）、Yetzira（形成）、および Assiya（行為）の世界がカバラと呼ばれるものであり、我々の世界の外皮が「明かされた科学」と呼ばれるものです。人は、Yetzira（形成）の世界の外皮の中に入るまで、研究の対象が何であるかにかかわりなく、カバラの秘密の部分に取り組みます。しかし、人は、Yetzira（形成）の世界に入ると同時にカバラを解明し、光が無意味な名称に取って代わります。

したがって、人は、秘密からカバラを学び始め、最後にカバラが現実になります。

この段階は、Assiya（行為）の世界における創造主の二重および一重の隠蔽、**Yetzira**（形成）の世界における啓示、**Beria**（作成）の世界における創造主への愛の達成、および **Atzilut**（発散）の世界における絶対愛の形での合体に相当します。**Ari** の著書『*The Tree of Life*（生命の木）』は、人々が堅実に、苦痛を感じることなく、確信を持って創造主に到達する助けとなるように記されたものです。



## 第 12 章 カバラの知識の秘密を公開するための条件

カバラの公開禁止の理由は 3 つあります。

- 公開の必要性がない。
- 公開が不可能である。
- カバラは創造主の個人的な秘密である。

カバラの 1 つ 1 つの内容のすべてにおいて、これら 3 つの理由による禁止が同時に課されます。

公開の必要性がないことを理由とする禁止は、知識の公開によって何らの利益ももたらされないことを意味します。唯一の考えられる利益は、社会に明らかな利益をもたらす場合です。「それでどうした」（自分は自分がすることをしたままであって、それには何の害もない）主義に従って生きる人々は、まったく不必要な内容に没頭し、また、他者を無理やり不必要な内容に没頭させます。そのような人は、世界の多くの苦悩の根源です。こうした理由で、カバリストは、カバラを秘密に取り扱い、不必要にそれを開示するのを慎むことができる学習者のみを受け入れたのです。

公開が不可能であるという理由による禁止は、捉え難い形而上の概念を言葉で説明することができないという制約から生じるものです。言葉を手段とするあらゆる試みに対して失敗の宣告が下されており、また、そうしたすべての試みが学習者を混乱させるにすぎない誤った結論を導くという理由で、こうした秘密の開示には、上層からの特別な許可が必要です。

上層からの特別な許可は、偉大なカバリスト、Ari の著作に次のように記されています。「偉大なカバリストの魂は、外なる光（包む光）または内なる光（満たす光）で満たされています。包む光で満たされた魂は、秘密に言葉を与えて、それを徳のある人のみが理解できるようにそれを説明する能力を持っています。」

「『ゾハールの書』の著者である偉大なカバリスト Rashbi（ラビ Shimon Bar-Yochai、紀元前 2 世紀に生存）の魂は、包む光で満たされていました。それ故に、彼は、Great Assembly（大集会）の前に演説をしたときに、徳のある人のみが彼の言うことを理解できるような方法で、宇宙の秘密を説明する能力を身に付けていたのです。そのため、Rashbi だけが、『ゾハールの書』を記す許可を上層から受け取ったのです。Rashbi よりも前に生存していたカバリストはより多くのことを知ってはいたものの、彼らは、Rashbi のように形而上の概念を言葉で飾る才能を持ち合わせていなかったのです。」

したがって、カバラを公開するための条件は、カバリストの知識ではなく、カバリストの魂の特質に左右されることが分かります。カバリストは、こうした特質を持つことを唯一の理由として、カバラの特定の部分を開示せよという指示を上層から受け取るのです。

それ故に、『ゾハールの書』よりも前に書かれた、カバラに関する基本的な著作を何ら見出すことができないのです。入手可能な著作には、漠然とした取るに足らないヒントが収録されているにすぎません。Rashbi の後、Ari のみがカバラの別の部分を開示することを許可されました。Ari よりも前に生きたカバリストは、Ari よりも多くのことを知っていたと推測されますが、彼らは上層からの許可を受け取っていません。

カバラが**創造主の個人的な秘密である**という理由による禁止は、カバラの秘密が、創造主に身を捧げ、創造主を尊敬する人のみに明かされることを意味します。これは、カバラの秘密を広範な人の集団から遠ざける最も重要な理由です。多くの偽善者が、予言を利用して愚か者を誘惑し、人々を凶眼の魔力から「救う」魔よけを作ることによって、また、その他のいわゆる神業によって、自己の利益のためにカバラを利用しました。

カバラは当初、まさにこの理由で秘密にされたのです。したがって、真のカバリストは、自身の弟子に非常に厳しい試験を受けさせることを約束しました。このことから、あらゆる世代のカバラを研究する許可を与えられた少数の人々でさえ、上述の 3 つの禁止が適用されるカバラの内容のわずかな開示も行わないことを誓った理由が分かります。

しかし、これら 3 つの禁止がカバラを 3 つの部分に分割すると考えてはいけません。逆に、カバラのすべての言葉、概念、および定義に、3 つのタイプへのカバラの真正な意味の隠蔽の分類が適用されるのであり、この分類は、カバラの科学において絶えず効力を持つのです。

この秘密の科学が終始一貫して隠蔽されるなら、あらゆるカバラに関する著作はどのようにして現れたのかという疑問が生じるに違いありません。その答えは次のようになります。最初の 2 つの禁止は、3 番目の禁止と異なります。なぜなら、3 番目の禁止はすべてのうちで最も厳しいものであるからです。最初の 2 つの部分は永久に効力を持つわけではありません。なぜなら、**開示の必要性がない**という禁止の条件は、外部の社会的理由によっては、**開示の必要性がある**という指示に変わることがあるからです。人類の発達に伴って、また、(Ari および Rashbi、ならびにより低い等級のその他のカバリストの場合のように) 許可が受け取られることにより、カバラに関する真正なる書物が現れようとしています。

## 第13章 基本概念

**カバラ**は、この世に存在する創造物に創造主を啓示するための手法です。カバラという語は、Lekabel（受け取り）という語に由来します。この世に生きる人々の目標は、無限の喜びのすべてを受け取ることであり、そうした喜びのためにすべての創造物が形成されたのです。

**他人に対する感覚**は、人間の内面においてのみ生じます。そうした感覚は、人間に羨望、共感、恥、および精神的上昇の感覚をもたらします。他者を感じる能力は、我々が創造主を感じるできるように、我々の内面に創造されたのです。

**創造主に対する感覚**とは、ある人がその仲間の人を感じるのとまったく同じように、すべての人が創造主を感じることを意味します。モーセは、創造主と差し向かいで話をしたと伝えられています。これは、モーセが、自分と創造主との意思の疎通において創造主への絶対的到達感を持っていたことを意味し、その親密さの程度は、友人との親密さに喩えられます。

**行為の結末**は、最初の考えによって決定されます。家を建てようとする人が最初に計画を立て、最終目標に従った仕様に基づいて作業するのと同様に、人の行為はすべて、予め定められた最終目標によって決定されます。

我々は、天地創造の究極目標を明確にした後、天地創造とそれを支配する方法が究極目標と一致することを理解します。支配の目的は、人類が徐々に発達し、最終的に我々が、我々の世界の他の創造物を感じるように創造主を感じるようになることです。

形而上の世界への段階的到達の道は、**上層から下方**に延びています。つまり、これは、人が自分自身を感じるのとまったく同じように他者を感じることができ、また、創造主自身に至るまでのすべてのレベルにおいて形而上の物などを形而下の物を感じるように感じる点まで我々が発達することを示します。これは創造主が定められた到達の秩序であり、到達は、創造主が上層からの降臨を決断されるレベルに沿って進みます。これは、この道が既に存在し、より高いレベルが解明されると、対応するより低いレベルも完全に解明されることを意味します。

形而上の世界と最終的な我々の形而下の世界のどちらの天地創造の順序も、**下から上層**に向かいます。

**天地創造の法則の形而上の遵守**：天地創造の目的を達成したいという考えと願望は、精神的完成を達成する手段となります。

**カバラの時代区分**：天地創造の始まりから第二神殿の崩壊まで、カバリストは「公然」とカバラを研究していました。特に第二神殿とそこで行われていた礼拝を通して、あらゆる形而上の力が我々の世界においてよりはっきりと認識され、我々と形而上の世界の間でより緊密な意思の疎通が図られ、またそうした意思の疎通が重要視されていました。

社会の道徳レベルが低下するにつれて、我々は卑しくなり（すなわち、創造主の特質と異なる特質を持つようになり）、形而上の世界を感じる能力を失いました。それ故に、第二神殿が崩壊し、追放の時代が始まったのです。カバリストは、内密に研究を続け、その結果、カバラは「卑しい人」には手の届かないものになったのです。

創造主はその知恵を世界から隠すことを望まれたが、世界に救世主の時代が到来しつつある時期が来ると、子供でさえ創造主の秘密を解明するであろうと『ゾハールの書』に記されています。人々は、未来を予測し研究することができるようになり、その時、創造主は、すべての人々に自分自身を啓示されるでしょう。

Rashbi は、追放の時代が到来する前の最後のカバリストです。それ故に、『ゾハールの書』を記す許可を上層から受け取ったのです。

カバリスト Ari (ラビ Yitzhak Luria) が現れ、形而上的にカバラの全体を達成するまで、カバラはほぼ 15 世紀にわたって禁止されていました。Ari はその著作において、我々のために『ゾハールの書』の内容を明かしています。「(途中省略) 第六の千年紀の 600 年の間に、知識の源が上層で開かれ、知識が流れ落ちるであろう。」

カバリスト Abraham Azulai (紀元 6 世紀) は、古代の稿本の 1 つに次のことが記されているのを発見しました。「天地創造から 5,300 年後 (紀元 1,539 年) 以降、大人と子供の如何を問わず、すべての人が、カバラを公然と研究することを許可されるであろう。そして、まさにこの理由により、救世主が到来するはずである。」

偉大なカバリスト Yehuda Ashlag (Baal HaSulam) が我々の時代に現れ、我々の魂に適した方法を用いて、カバラ全体を明確で分かりやすい言葉で解明したと言う事実は、我々が時代の末期に生きていることの印です。

**カバラの科学の特徴**は、我々の世界に関する完全な知識（すなわち、あらゆる科学の未解明の全体像）とその要素を含むという事実に見出されます。カバラの科学がこうした特徴を持つのは、カバラが、我々の世界を支配し、我々の世界の起源である根を研究する科学であるからです。

**魂**とは、誰もが感じる「自分」です。より綿密に考察すると、魂は、それに生命力を与えて「動物的」魂を生み出す力だけでなく、「形而上の（崇高な）魂」として知られる形而上の世界への憧れの力を分裂させて我々の身体の中に入ることが分かります。ただし、「形而上の魂」は、精神的に未発達の人の内面には実在しません。

**形而下の身体と動物的魂**は、我々の世界の産物です。それらは、我々が感覚器官を通しての知覚には十分です。我々は、形而上の魂を発達させることによって、自分の向こう側を感じる能力を獲得します。こうした獲得は、利己的な「自分」を否定することによって形而上の愛他的な「自分」が現れたときに起こります。その結果、我々はより強い形而上の第六感を感じるようになり、ついには、魂が

「核心」からそれに固有の能力まで発達を遂げるのです。

**カバラの内なる本質**は、創造主自身から発せられ、特定の法則に従って我々に到達する、創造主の光についての研究です。

**根と枝の法則**は、我々の世界の創造物のすべての部分の成長と発達を強く促す力の作用を決定する法則です。カバラでは、「穀物は、それを根付かせそれに「成長せよ」と告げる上層の天使がいなければこの世に存在しない」と言われています。**枝の言葉**は、他の世界で起こることについての情報を解明する助けにもなります。ある世界に住む創造物は、よく似た方法でその世界の物を認識し、それ故に、独自の言葉を使用して情報を交換することができるのです。人は、他の世界で起こることを同じ言葉を使用し、同時にそれが我々自身に対応する、他の世界の物を指すことを示しながら、他人に知らせることができます。これこそ真に、トラーの著述に使用された言語なのです。

**すべての世界は互いに似ています**。違いは、専らそれらの創造に使用された材料にあります。上位の世界に行くほど、物の純粋さが高まります。しかし、各世界の機能や形態は同じであり、後の世界はそれぞれ、その前の世界（根）の正確な複製（枝）であるのです。

**ある世界に住む創造物は、その世界の境界の内側でのみ知覚することができます**。なぜなら、感覚器官は、その特定の世界の物のみを知覚するからです。人間だけが、すべての世界に同時に到達できるのです。

**到達のレベル**とは、連続的な創造主に対する認識の程度です。それらのレベルは、我々の世界から形而上の世界に上る梯子の段に喩えられます。梯子の一番下の段は、「*Machson*（障壁）」と呼ばれます。それは、形而上のすべての力を我々から完全に隠すので、我々はそれらをまったく知覚できません。それ故に、我々は、源と、我々の世界での人生の目的を見出そうとするのです。

**形而上の世界の光**：情報、感情、および喜びは、（活力と暖かさを与える我々の世界の光、または思考、明瞭性、および悟りに関連する光に似ていることから）「光」と呼ばれる形而上の力の膨張と収縮によって受け渡されます。

**存在する権利**：善悪を問わず、さらには最も有害なものも含めて、我々の世界のすべての物が存在する権利を持っています。我々には、是正と改善を行う機会が与えられています。我々の世界には、余分な物や不必要な物は存在しません。すべての物が、直接に、また、間接的に人類のためになるように創造されています。こうした理由により、我々は自己を是正して、有害な影響力を制するのです。

**是正**：創造主は、我々の世界の創造をまだ終えておられません。創造を完了し完全なものにする任務が我々に託されています。我々の世界は、成熟の途中で苦味を残している果物に喩えることができます。そうした苦味をなくし、果物を甘くすることが、我々の任務であり、目標であるのです。

## 2つの是正の道

1. すべての人が形而上の是正の法則を受け入れる道は、「光の道」と呼ばれます。創造主の観点から見れば、この道の方が好ましいこととなります。なぜなら、創造主の目標は、創造物にその存在のあらゆる段階において喜びを与えることであるからです。我々は、この道を選べば、果物の苦味を感じなくてよいのです。
2. **苦難の道**：人類は、6,000年間にわたる試行錯誤を通して、何はともあれ創造の法則を守らなければならないことを悟りました。

**報酬**とは楽しみ（熟した果物の味）のことです。我々は、自分自身にのみ影響を与えることができ、自分の外側のいかなる物にも影響を与えることはできません。したがって、すべての人が自己完成に取り組む場合に限り、是正を行うことができるのです。

**カバリスト**とは、創造主との同等性に到達した、我々の世界のすべての人をいいます。我々は、形而上の法則を研究し、守ることによって、自分が形而上の世界の一部になる程度まで、自己を精神的に向上させることができるのです。

**到達**は、形而上の物の本質と特質を研究することによって、自己に対する内面の治療を通してもたらされます。我々は、心理学上の感覚、空想、または暗示について語っているわけではありません。ここで言わんとする到達とは、すべての人の心理学上の知覚を超越した、より上位の、形而上の実体を持つ世界への真正なる上昇です。

喜びは、願望と憧れが与えられている場合に限り、感じることができます。願望は、結果的に喜びがもたらされることが分かっている場合にのみ存在し得るのです。憧れは、喜びが存在しないある短い時間にも、起こり得るものです。刑務所から釈放された経験を持たない人は、自由の有難みが分かりません。また、病気の人だけが健康の有難みを本当に理解しているのです。我々は、願望と憧れの両方を創造主から受け取るのです。

創造物は、創造主の内面に存在しない欠乏感にすぎません。人は、発達度が高くなるほど、欠乏感を強く感じるようになります。この欠乏感は、むしろ単純な人や子供の内面で抑制されやすいと言えます。本来人間というものは、世界全体を欲しがらるものなのです。知恵のある人は、我々の世界だけでなく、その他の世界も欲しがります。

カバラでは、願望と憧れが合体したものを **Kli**（器）と呼びます。喜びそのもの **Ohr**（光）は、創造主から発せられます。

**喜びの感覚**：器は、光の浸入を、器の特質と光の特質の類似性に応じて感じ取ります。これらの特質の類似性が高くなるほど、器の与える能力、愛する能力、喜びをもたらす能力は高くなり、受け取る意思は小さくなります。器と光の関係が親密であるほど、器が感じる光と喜びの量が多くなります。

**形而上の世界における存在**：我々が創造主（光）を感じる能力を持つか否かは、我々と創造主との特質上の同等性に基づく親密性によって決まります。なぜなら、

我々のすべてが器であるからです。器に備わっている、それ自身の願望を捨てて他人に与え、他人を思いやり、他人のために苦しみ、他人を愛し助ける願望が最小限であったとしても、この器は形而上の世界に存在し、その特質によって、その器が占める場所が決まります。

**悪の認識：**与える意思が器の中に存在しない場合、器はこの世での自身を知覚します。そのような器が人の「身体」と呼ばれるものであり、その唯一の願望が自分自身を思いやることなのです。我々は、無私無欲で他人のために何かをする能力を想像することさえできません。人は、「悪の認識」（すなわち正確かつ厳密な自己分析）を経験することによって、無私無欲で他人のために行動することに対する無能力さを測ることができるのです。

**器の完成：**器（*Kli*）は、光の中に存在するすべての喜びに対する願望を受け入れることができるように創造されます。制約と器の破壊が生じたために、ある数の個別の器が作られました。これらの器のそれぞれは、1つの状態（世界）から別の状態に移動し、その結果、別離（死）が起こります。

すべての人が、この世に生きている間に、各自の器の特質を光の特質と同等にし、それに応じた量の光を受け取り、他の器（魂）と再び結合して、光（喜び）で完全に満たされた1つの器を作らなければなりません。このような将来の状態は、**Gmar Tikun**（是正の完了）と呼ばれます。

**器への光の浸入：**人と人との相違は、各自の願望の強さに基づきます。精神的弾圧や殺人が禁止されるのは当然です。形而上の器の特質を研究することにより、形而下の器（人間）は、形而上の器と同等でありたいという願望を刺激します。形而上の世界の願望が行為を構成するので、我々が自己を徐々に是正すると、光は我々の器に入ることができるようになります。光は、器の中に存在する間に、器を浄化します。なぜなら、光の本質は「与えること」であるからです。光は、この性質を利用して、器の特質も徐々に変えてしまうのです。

**最初の制約（*Tzimtzum Aleph*）**は、最初の総体的な形而上の器がその出現の直後にそれ自身に課した禁止、誓いです。これは、創造主の唯一の願望が器を喜びで満たすことであるにもかかわらず、器がそれ自身に、自身のために楽しむのではなく、専ら創造主のために楽しむという条件を課したことを意味します。

その結果、思考のみが変化し、行為そのものは変化しなかったのです。これは、器が光を受け取るのは、器が光を欲しているからではなく、光を受け取ることが創造主の願望であるからだということを意味します。したがって、我々の目標は、受け取る意思を果たすこと、すなわち創造主が喜びを求めるように喜びを求めることなのです。

**感覚**とは、光の不存在または存在に対して反応する特質であり、この反応は光の分量が非常に少ない場合にも起こります。原則的に、我々の人生全体は、単なる感覚の周期で成り立っています。大抵の場合、我々にとって自分が何を楽しむかは重要ではありません。しかし、我々は喜びなくして生きることはできません。

認められることや名声を得ることは感覚をもたらすにすぎませんが、喜びは我々にとって極めて大切なものです。

我々の状態は常に、世界の状態とは関係なく、周囲の雰囲気と認識に左右されま  
す。我々の感覚のいかなるものも、我々の内面生活や環境の影響の産物ではあり  
ません。なぜなら、すべての感覚は光または光の不存在であるという理由から、  
それらの根源は創造主自身ということになるからです。

我々は、自己の倫理的状態に応じて、自分自身または創造主、あるいはその両方  
を感じます。我々は、専ら自分自身を感じながら、創造主が存在し我々に影響を  
及ぼすことを信じることができます。我々が自分自身を自立した創造物として認  
識し、かつ、我々のみが存在すると確信するという事実は、我々が創造主と精神  
的に相違し、創造主から遠ざかったことの結果なのです。

**意図 (Kavana)** は、人が行うすべての行為の中に存在する、唯一かつ最も重要な  
ものです。その理由は、形而上の世界では、思考が行為を構成するからです。  
我々の形而下の世界でも同様に、危害を与える意図をもってナイフで他人を傷つ  
けた人には罰が与えられるのに対し、治療（外科治療など）の目的をもってナイ  
フを使用する人には報酬が与えられます。

ある人に対して形而上の世界の絶対的な法則に従って判決が下されると仮定すれ  
ば、その人に形而上の罰が与えられる理由は、あらゆる邪悪な考えであるに違  
いありません。形而上の世界ではこれが本当に起こるのです。

我々の気分や健康も自己の意図に左右されますが、自分の仕事の難しさや性質、  
あるいは経済状態には左右されません。我々が制御できるのは自己の物理的行動  
だけであり、また、我々は形而上の世界を利用して自己の感情を変化させている  
にすぎないことに留意しなければなりません。

それ故に、祈りが最高の重要性を持つのです。祈りは本質的に、存在する万物の  
魂、すなわち創造主へのあらゆる引力（心から発せられる無言の引力を含む）と  
なり、創造主のために、すべての創造物が同等であり、必要とされているのです。



## 第 14 章 FAQ (よく尋ねられる質問)

**質問：カバラの主題は何ですか。**

太古の時代以来、人類は、「自分は誰であるのか」、「自分の人生の目的は何であるのか」、「なぜ世界が存在するのか」、「人間は死後も存在し続けるのか」という存在についての重要な問いに対する答えを探し求めてきました。

すべての人が、自分が自由に利用できる情報源から、これらの問いに対する独自の答えを見出そうと試みています。我々は皆、最も信頼性が高いと思われるアプローチによって導かれた独自の世界観を発達させます。

人生の意味について問うことによって、日常的な苦悩の他に、より広範な不満が生じます。「自分は何のために苦しんでいるのか」という問いは、たとえ自己の日常的な願望の 1 つが一時的に満たされているときであっても、我々にいかなる満足ももたらしません。

我々は、目標を達成したときでさえ、すぐに不満を感じ始めます。我々は、過去を省みて、欲しがっていた物を手に入れるのに費やした時間がいかに多く、その見返りとして得られた喜びがいかに少ないかを認識します。

上述の問いに対する答えがないという理由から、人々の憧れは古代の信仰に向けられます。我々は、瞑想、運動、および精神活動を助けとして、より多くの快適さを感じます。しかし、これは自分自身を忘れようとする試みにすぎません。なぜなら、願望が満たされず、人生の意味が捉え難いことにならないからです。そのようなすべての方法が我々の心を静めるのは、人生の目的や苦悩の意味についての問いに対する答えをもたらすからではなく、我々の要求を低減する助けとなるからなのです。

しかし、我々はすぐに、真実を無視することができないことに気付きます。人間は、絶えず、その存在に対する筋の通った理由を追求します。人間は、数千年にわたり自然の法則を研究し続けてきたのです。

現代の科学者は、自己の研究が進むにつれて、世界像が見え難く、理解し難くなることを知っています。現代の科学書は、神秘主義に関する書物や空想科学小説と似ていますが、人生の意味についての問いに対する答えを与えるものではありません。

カバラの科学は、世界を研究するための独自の方法を提供します。カバラの科学は、我々が宇宙の隠された部分を感じる助けとなります。カバリストは、個人的な経験に基づいた手法を我々に教えます。カバリストは、その著書において、宇宙を研究する方法を記し、人生の意味についての問いに対する答えを得る方法を示します。

**質問：カバラが「秘密の科学」と呼ばれる理由は何ですか。**

カバラは、人間にとって最も身近な科学です。なぜなら、それが人生の目的、

我々がこの世に生まれこの世に生きる理由について語るからです。カバラは、人生の意味、我々がこの世に生まれる前に居た所、我々がこの世の人生を終えた後の行く先について説明します。

カバリストは、この世にまだ生きている間に、これらの問いに対する答えを得ます。カバラの研究は、形而上の世界についての知識を与え、同時に周囲の現実を知覚するもう 1 つの器官である第六の感覚器官を発達させます。人が宇宙の隠された部分を感じるのはこの感覚によるのです。

通常は隠された、宇宙の到達可能な部分は、我々の自分自身についてのあらゆる疑問に対するあらゆる答えを我々に与えます。我々にとってこの知識よりも身近で重要なものは他にありません。なぜなら、この知識は、我々自身、我々が生きている世界、我々自身の運命についての教えを我々に示すからです。

**質問：** カバリストとはどのような人をいいますか。

カバリストは、外見上は他のすべての人々と同じです。カバリストには、賢明さや学識は要求されません。外見上は、一般の人々と何ら変わりありません。カバリストとは、カバラの研究を通して「第六感」、すなわち世界の隠された部分に対する感覚をさらに身に付けた普通の人々をいいます。第六感は、普通の人々から隠されており、普通の人々はそれを「形而上の世界」と呼びます。カバリストは、この新たに獲得した感覚を働かせて宇宙全体を知覚し、我々の世界と形而上の世界を、我々が日常の現実を認識するのと同じように、明確な現実として認識することができます。

カバリストは、上層世界を感じ、そこに直接到達します。この世界が「上層世界」と呼ばれるのは、それが我々の通常の知覚の範囲を越えたところに存在するからです。カバリストは、万物が上層世界から降りて来て、我々の心の中に現れることを理解しています。カバリストは、上層世界と我々の世界の両方に同時に存在するので、すべての原因と結果を知っています。

普通の人々は、周囲の世界の一部分しか知覚できず、この一部分を「我々の世界」と呼びます。カバリストは、宇宙の全範囲を知覚することができます。

カバリストは、特殊な言葉で記した書物の中で、自己の知識を伝えます。したがって、人は、カバリストの指導の下で、特別な方法に従うことによってのみ、これらの書物について研究することができるのです。そのような場合、これらの書物は、真の現実には到達するための手段となります。

**質問：** なぜカバラを研究することが重要なのですか。

すべての人に第六感を発達させる機会が与えられています。カバリストは、形而上の世界を知覚しその影響を直接受けながら、書物を記しました。これらの書物を読むことによって、読者は、それに記されていることをすべて理解できなくとも、「包む光」を自分自身の方に引き付けます。

我々は、研究を続けるうちに、自分自身のもとにこの光を引き寄せ、光は完全な

現実像を徐々に我々に明かします。宇宙全体を知覚することができるこの第六の形而上の感覚は、すべての人の内面に潜んでおり、「心の核心」と呼ばれます。包む光だけがそれを満たすことになっています。この光が「包む光」と呼ばれるのは、第六感を満たすという理由によりますが、この光は心の核心を満たすことはできません。

第六感の胚に相当するこの核心は、包む光がその中に入ることができるように、拡大し十分な「容量」を獲得します。心の核心に光が入ることによって、学習者の心の中に、形而上、崇高、および超越に対する最初の感覚が生まれます。光が核心に入ったとき、我々は、上層世界のより広範で明確な像を知覚し、過去と未来を見ることができます。

『*Introduction to the Study of the Ten Sefirot* (10 個のセフィロートの研究の手引き)』の第 155 項に、次のことが記されています。

「カバリストは、なぜ、1 人 1 人にカバラの研究を義務付けるのであろうか。その理由は、カバラを研究する人々は、学んでいることを理解していなくとも、理解したいという願望によって、自己の魂を包む光で自分を目覚めさせるからである。これは、創造主が創造の思想において準備されたすべての物に到達できることがすべての人に対して約束されていることを意味する。この世の人生においてそれを獲得することができない者には、将来の人生のいずれかにおいてそれが与えられるであろう。この光は、人が心の中にそれを受け入れる能力を獲得するまで、外側から照らし続け、その人がそれを知覚する感覚を生み出すのを待ち続けるであろう。」

我々がカバラを研究しているとき、第六感がまだ発達していないが故に、魂の中に納められていない包む光が、すぐに我々を照らします。それにもかかわらず、我々が研究中に毎回受け取る光は、我々を浄化し、我々が心の中に光を受け入れることができるように我々を適合させます。光を受け取ることによって、絶対的な知識、平穩、および不滅感が与えられます。

**質問：カバラの情報はどうのようにして伝えられるのですか。**

カバリストは、上層世界に関する自己の知識を口頭で、また、書物の中で伝えてきました。カバラは、紀元前 18 世紀にメソポタミアで誕生しました。蓄えられた知識についての説明が、Abraham の作であるとされる『*The Book of Creation* (創造の書) (*Sefer Yetzira*)』に記されています。この書は今日でも書店で入手することができます。

あらゆる世代のカバリストが、その特定の世代の魂のために書物を記しました。何世紀もの間に、複数の言語がカバラに使用されてきました。その理由は、人間の魂が徐々に発達したからです。何世代にもわたって卑しさを増した魂が過去の人生経験を持ってこの世に戻って来ます。そうした魂は、苦難の増加という重荷をもたらしますが、同時に形而上の「重荷」ももたらします。この情報は個人から隠されていますが、人の心の核心に存在します。

それ故に、すべての世代が、カバラを理解するために、降りて来る魂に適した独自の言語を必要とするのです。人類の発達は、この世に魂が降りて来ることです。あらゆる世代において、魂が降りて来て新たな身体として現れると、同じ魂が発達し、精神的向上の必要性を悟り、神の知識、不滅、および完成に到達するのです。

**質問：形而上の世界を初めて感じるまでにどのくらいの時間がかかりますか。**

『*Introduction to the Study of the Ten Sefirot* (10 個のセフィロートの研究の手引き)』には、真正なる源を手段として学習する人は、3~5 年以内に形而上の世界に入ることができると記されています。これは、学習者が正しい意図を持って学習すれば、この世と形而上の世界の間に存在する障壁を乗り越え、上層世界に到達できることを意味します。